

東京桑野会会報

● 2004年4月1日発行 ● 発行・編集人 古川清 ● 発行所 東京桑野会事務局 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-3-8 YKB新宿御苑804

母校創立 120 周年記念号



- ① 桑野の母校に学んだという共通の経験に結ばれた同窓の親睦の会であること
- ② 会員はみんな仲良く相親しみ楽しい会であること
- ③ 何らかの意味で会員の頼りになるような面もある会であること



No.26



ご挨拶 —— 母校創立 120 周年にあたって

東京桑野会会長 古川 清

本年は母校創立120周年に当る。喜ばしいことである。明治17年といえば、わが国が近代先進国を目指して生みの苦しみを味わっていた時だ。対外的には不平等条約解消を目指し条約改正の意図を各国に通告した年だし、国内的には三春出身の河野広中らの自由民権運動が過激化して自由党が解体に追い込まれた年でもある。その時期に開校されたわれらの母校の歴史は近代日本の歩みと重なっている。改めて母校の120年の歴史の重みと、そこで学んだ誇りを感じざるを得ない。

その120周年を目前にして澤田悌名誉会長が亡くなられたのは残念であった。澤田さんは東京桑野会の中興の祖であり、氏の指導力なかりせば会はおそらく今頃衰微していたに相違ない。

会報の第一頁に掲載されている東京桑野会の三原則は澤田さんの書下しであるが会のあるべき姿を実に良く纏められている。私なりに解釈すれば次の通りとなる。

第一の原則は「同窓の親睦」である。親睦の会であるのだから、いかなる意味でも親睦にダメージを与えかねない要素は会の運営から排除せねばならぬ道理となる。特に「政治」や「商業主義」の要素は絶対駄目である。政治はプロ・アンド・コンで常に対立がつきものだし商売は利益とからんでしまう。要するに親睦以外の目的のために東京桑野会が使われてはならないということである。

「同窓」については、会員の資格要件は「安積に学んだ」ことのみであり、会員はすべて平等ということの意味する。職業や社会的地位などは会の運営においては関係のない事柄である。東京桑野会の会員は40期台から110期台まで70年の幅があるがすべて年齢層に配慮した運営が望まれる。特に本年からは女性会員も入会するのでこの点についても意を用いなければならない。

第二の原則は「楽しい会」である。会員であることが楽しいものであるようにせよとの澤田さんの遺言だと私は思っている。会の最大の行事は年一回5月に目白の椿

山荘で開かれる総会と懇親会であるがこれを会員にとり待ち遠しい程楽しいものにすることが企画に携わる私共役員に課せられた任務と考えている。「そうなっているか」と問われると自信はないが、此の点については会員諸兄より提案やサゼスションも頂いて引続き改善を試みたいと考えている。

第三の原則は「頼りになる」ことである。この原則の実現が実は一番難しい。頼られる前提としてのコミュニケーションの確保が難しかったからだ。併し東京桑野会のホームページが出来て事情は革命的に改善された。HP（ホームページ）誕生の経緯については昨年（2022年）の第25号会報に詳しく載っており、東京桑野会と検索するだけでHPの会報欄アクセスが可能となる。このHPは業者に頼んだのではなく、コンピューターに詳しい会員諸兄達のボランティアの手作りの結晶でありコンテンツは実に素晴らしいと自負している。これだけの内容のHPを自前で立上げた高校OBの会は余りないと思う。HPには「会員親睦の頁」があり様々な情報の入手ができる上に、同期会開催などの情報のインプットも可能である。コンピューターさえあれば会員相互の意思の疎通は非常に容易になった。ITさまさまである。会員諸兄におかれては、東京桑野会のホームページを大いに活用して頂きたい。

以上が私なりの独断的解釈であるが私には一つの夢がある。新しく東京地区にやってくる新卒同窓生諸兄姉達に彼等の新しい生活がスムーズにスタートできる様東京桑野会として何か手伝ってやれないものかということである。私自身昭和24年に東京にやって来て寮生活を始めたが東京の生活にとけ込むのに初めの中は苦勞したことを思い出す。澤田さんは常に若い世代への配慮の要を説き、彼等の意見を取入れることを重視されていた。若い世代の支持なくしては会の永続的繁栄はあり得ないのである。三原則を考えながら改めて澤田悌名誉会長の御遺徳を偲んだ次第である。

母校安積高校が創立120周年を迎えました。記念式典・祝賀会等を次の通り開催いたします。多数の同窓会員の皆様が参加されますようにご案内申し上げます。

- 期 日 2004年(平成16年)6月19日(土)
- 時 間 午後3時30分—受付開始
午後4時30分—総会・式典
午後5時——記念講演(湯浅譲二)
午後6時——祝賀会
- 総 会 1. 事業報告・決算の件
2. 事業計画・予算の件
- 式 典 会長挨拶
- 記念講演 「アメリカの大学生生活を顧みて」(湯浅譲二)
- 場 所 目白 椿山荘
東京都文京区関口2-10-8 (TEL 03-3943-1101)
JR目白駅、地下鉄有楽町線江戸川橋駅下車
- 会 費 祝賀会費 8,000円(学生は年度会費込み 3,000円)
2004年度東京桑野会会費 2,000円

東京桑野会は会員皆様の年度会費によって運営されています。

当日ご出席出来ない会員の皆様には、同封の振込用紙で年度会費 2,000円のお振込みのご協力をお願い申し上げます。

◇準備の都合もございますので、出欠の返事は同封の葉書で5月20日迄にご返送下さいますようお願い申し上げます。

◇また、連絡もれもあるかと思われますので、先輩、同期、後輩もお誘い合わせのうえ、多数の出席をお願いいたします。

母校便り

★ 2004年の大学合格状況は、現役・卒業生合わせて東京大学7名、東北大学33名、以下北大6、福島大25、筑波大9、埼玉大13など、国公立大学で232名。私立では中央大学の48名を筆頭に、明治43、早稲田42、東京理科大34、法政33、日大33、慶応20など647名の合格者を出した。
★ 部活動は、女子の健闘が光った。先ず、剣道部。県大会の女子団体が優勝を果たした。また、ソフトテニス部では県高校インドアテニス選手権の女子個人戦で七海早貴・本田千晶組が優勝、つづく東北大会でも予選ブロック2位の好成績をおさめた。また、柔道部は、東北大会の女子個人の部で2名が3位入賞を果たし、今後の活躍が大いに期待される。男子はラクビー部が県新人大会で優勝したのが目立った。

安女出身の諸姉妹を総会に招待

母校創立120周年記念を祝して、東京花かつみ会(安積女子高校・安積黎明高校同窓会東京支部)の木村(久保田)登志子会長はじめ役員の方を10名ほど総会にお招きしております。

卒業生から節目の方々へ

母校創立120周年の本年は、下記各期の方々には母校卒業からそれぞれの節目の年にも当たります。お誘い合わせの上、出席されてはいかがでしょうか。

- ・卒業70年(昭和9年卒業) 46期
- ・卒業60年(昭和19年卒業) 56期
- ・卒業50年(昭和29年卒業) 67期
- ・卒業40年(昭和39年卒業) 77期
- ・卒業30年(昭和49年卒業) 87期
- ・卒業25年(昭和54年卒業) 92期
- ・卒業20年(昭和59年卒業) 97期
- ・卒業10年(平成6年卒業) 107期

人が、季節が、集います。

味

お食事

伝統の味に季節の彩りそえて

- 料亭・錦水
- 松阪牛和風料理・離れ家
- レストラン・カメラア

宴

ご宴会

華やかな集いに17の大小宴会場

- 2,500名様までのパーティ、国際会議、ファッションショーなどのお集まりに。
- 最新機能の音響装置。

寿

ご婚礼

佳き日に永遠の幸せを誓う

- 800名様までの日本料理、フランス料理、着席ご披露宴。
- 庭園での記念撮影も随時お撮りいただけます。
- チャペルでのご挙式も承ります。



CHINZAN-SO
椿山荘
03-3943-1101

会員動向

○佐藤一男氏（65期、元原子力安全委員長、(財)原子力安全研究協会理事長）は2003年秋の叙勲で栄えある旭日重光章を授章されました。

氏は長年に亘り国の原子力行政、特に原子力安全委員長として原子力の安全という重要な仕事に尽力されました。

本号に「安積時代の思い出」を寄稿戴きました。

○増子輝彦（79期）

○根本匠（82期）

○玄葉光一郎（96期）の3氏は、2003年11月に行われた第43回総選挙で衆議院議員に当選されました。

根本匠議員は衆議院の経済産業委員長に就任されました。3氏の国政での益々のご活躍を祈ります。

○宗像紀夫氏（73期）は2003年12月名古屋高検検事長を勇退され、中央大学の法科大学院教授に就任されました。

○樽井澄夫（79期、クウェート大使）と橋本逸男（79期、ラオス大使）の両氏は、ともに安積同期の特命全権大使として日本も属するアジアの東と西で世界平和のためにご活躍中です。「イラク」隣国の樽井大使、ご苦労さまです。

○坪井栄孝氏（58期）は4期8年間務められた日本医師会会長を引退され、2004年4月1日付で「医療の質や安全対策など一定の水準に達した病院を認定する」機関である(財)日本医療機能評価機構の理事長に就任されました。

親父の背中

安積桑野会会長
石川 博之（63期）

完全に男女共学になり、女子剣道部は、昨年の夏福島県高校総合体育大会において優勝し、長崎県五島において行われた全国大会いわゆるインターハイに出場した。帰途、五島のサザエをおみやげに送ってくれた。

私は、サザエを見た時に、30年前に亡くなった父親を思い出して涙した。父親は私と同じ弁護士をしていたが、昭和48年5月に亡くなったのである。その年の正月、兄弟5人が集まったところで、「お前達にサザエを腹一杯食べさせてあげたい」と言った。それは、東京に住んでいた頃、子供達を連れて江ノ島に海水浴に行ったのであるが、たぶん小学校に入学していない兄貴が私が、路上で焼いていたサザエを食べたいと泣いたのだそうだが、父親はサザエを買う金がなく、私らにサザエを食べさせることができなかった。そのようなことは兄貴も私も小さかったから全然記憶にないが、父親はそれをずうーと「可哀想なことをした」と胸を痛め、40年間引きずってきたのである。父は「お前達に腹一杯サザエを食べさせてあげたい」と言って前述の話をした。子供達は「サザエはたくさんだよ」と言ってその場は皆で笑って過ごしたのであるが、父はその年の2月突然入院し、5月癌で亡くなった。虫が知らせたのかな。

兄が公務員で、郷里にいなかったため二男の私が父の跡を継いでいたので、私が喪主となった。石川家では初めての葬式で、てんやわんやで悲しむ暇もなかった。以来、私は30年間父親を思い出すこともなかった。夢を見る

こともなかった。私はサザエを見た時に、まざまざと正月の父親の姿を思い出したのである。そしてその夜、初めて父親の夢を見た。オーバーのえりを立て、寒そうにして境界事件で争われている山に行く父親の後ろ姿なのである。ハッと目が覚めた。

死ぬ前の年の12月、山林の境界事件で、鮫川村の現地で証人尋問があった。その前夜、父親が突然、「明日の証人尋問はお前が行ってくれ」「反対尋問は全然しなくてもよいから」と言った。10年来の事件で記録が厚く、全然見ていないので、何も反対尋問をしなくても良いからと言われても、駆け出しの私には重荷で、記録を親父に投げつけて突き返した。その直後、「まずいことをやった。勤務弁護士なら徹夜で書類を読んでも行かなければならないのに、書類を投げ突き返すとは」まずかったと思い、直ちに親父の前に行き正座し、「すみませんでした」と謝った。父親はただ一言「親子だからいい」といった。翌朝、私が行こうと思い、朝早く目を覚ましたところ、既に父親は起き、行く準備をしていた。「私が行く」と言ったら、「いいから、お父さんが行く」といって、父は小雪が舞う中を迎いの車に乗って出掛けていった。後から考えると、翌年5月には癌で死んだのだから、既にこの頃、癌にむしばまれて、出掛けるのがおっくうだったのだろう。これが父の最後の裁判であった。慚愧に絶えず、布団を濡らした。私は死ぬまで、父を思い出すたびに親不孝をしたことを思い出して、胸がキリキリと痛み、死ぬまで引きずっていくのだと思う。

剣道部のみなさんには、父親を思い出させていただいて感謝に耐えない。今年も女子剣道部は福島県選抜優勝大会で優勝し、名古屋で行われる全国選

☎ 0120-821-110

トランクルーム

家財保管

転動・改築・建替等

FAXでも受付しています

☎ 0120-856-110 <http://www.wns.co.jp/flower>



いいわ

引越センター

遠藤征志郎
(72期)

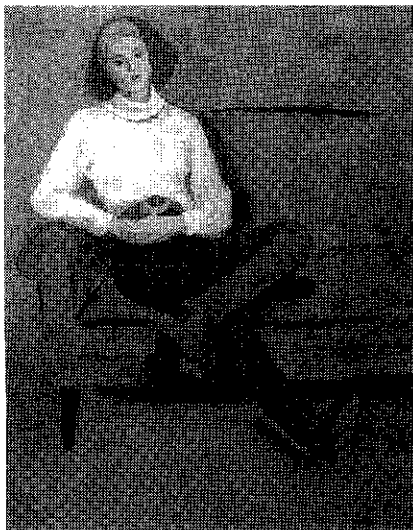
本社 東京都府中市白糸台1-23-10

関自振第1782号

抜優勝大会に出場する。心から、応援してあげたいと思う。

閑話休題

今年は大きな節目を迎える。本年3月には、最初の女子高校生が卒業するし、4月には、120期生が入学し、秋には、120周年の記念行事が行われることになっている。その準備が着々進んでいるが、2、3日前に記念事業の一つである同窓会館（合宿所）を部活の時に、合宿の時に男女生徒が同時に使えるように改装することになり、その改修工事の入札が行われた。完成すれば、春から、各部が利用してますます文武両道に励むことだろう。ただ、募金が今のところ、目標額に達していないので、実行委員会としては、頭を痛めているところであり、各位には一層のご協力をお願いするものである。



揺るぎない前進を 目指して

安積高等学校長 廣瀬 渉

安積高校も男女共学となって3年が経ち、2004年には創立120周年を迎え、3月には、本校としまして、初めての女子の卒業生が誕生します。

平成15年10月28日には、東京桑野会より古川会長、斉藤幹事長にご来校いただき、3年生に対し、激励と東京桑野会への勧誘をしていただきました。男女共学になりましても“安積の精神”を礎とし、お互いに切磋琢磨し、文武両道の達成を目指して頑張っている姿勢に変わりはありません。安積の精神を支えているものは沢山あると思いますが、その一つに、他校には例を見ない本校独自の「生徒職員協議会」があります。これは昭和25年当初は、職員生徒協議会でありましたが、平成14年に生徒の意見を大切にしたいということで、職員と生徒の順序を入れ替えて現在の名称となりました。

安積の歴史の中で、何か課題や変革があるとき、生徒と教師による話し合いが行われてきました。安中安高百年史によりますと、古くは大正10年（1921）に、安中における学校規律や授業、応援団などの問題について生徒から希望が出され、職員会議で協議され、その後、生徒代表と職員代表で話し合いが行われたとあります。それ以前にも茶話会、講談会、討論会、雄弁会等でお互いに思いを語り、討論してきたのです。ごく最近では、平成15年12月10日にも「身だしなみ」を話し合いのテーマとして、午後4時より始まり、予定の時間を超過して午後6時半まで生徒職員協議会が行われ、その中ではお互いに活発な議論が交わされました。

安積の精神がぶれる事なく、脈々と生きていく裏には、何時の時代も、常に“安積はどうあるべきか、安積高校生としてどう学ぶべきか”の問いが存在していたのであります。自ら驕る事なく、常に謙虚に問い続け、開拓者精神を礎に、努力する姿勢がある限り、安積は揺るぎない前進を続けていくことは間違いありません。

現在、安積高校の校長室には9本の優勝旗があり、その他にも優勝カップや盾が数多く陳列されております。平成15年度における部活動の活躍は目を見張るものがありました。今後も文武両面にわたり活躍してくれるものと思えます。これも先輩の方々の大なるご支援の賜物であります。また、先輩の方々各界における活躍は在校生の大きな支えとなっており、互いの絆は本当に強いものを感じます。

「先輩の活躍は後輩へのプレゼント
後輩の活躍は先輩のステータス
友達の活躍は自分の活躍」

安積高校は、まさにこのような学校であると思います。12月の終業式には在校生にも上記のことを話しました。お互いに切磋琢磨して頑張り、更なる活躍をしてほしいと念願しております。

安積の本分は、「次代を担い、社会や人類に貢献できる有意な人材の育成」にあります。生徒達の更なる成長のために、先生方と共に力を合わせて努めてまいります。創立120周年事業、SSHでの専門分野別講演会を始め、今後とも何かとお世話様になりますが、一層のご支援ご指導をお願い致しますとともに、東京桑野会の益々のご発展をご祈念申し上げます。

鞍手茶屋

東京で福島のけんちんともちを!!

—— 昼はそば、夜は酒と肴 ——

霞ヶ関店 〒100-6001 東京都千代田区霞ヶ関3-2-5 霞ヶ関ビル1F 電話 03-3581-7066

大手町店 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-1-3 大手センタービルB1 電話 03-3213-2385

中山峠店 〒963-1304 福島県郡山市熱海町国道49号線中山峠 電話 0249-84-3774

(店主) 上野富衛 (78期)

創立120周年を祝して

東京花かつみ会会長
木村 登志子

安積高校創立120周年おめでとうございます。

東京桑野会が記念総会の準備を進められておられるとのこと、思い返しますと平成6年の110周年記念総会に東京花かつみ会もご招待を受け、役員になりたての私も出席させて頂いてから10年、一昔、瞬く間とも感じられます。その後毎年会報をお送りいただき、安高、安女、の青春時代が蘇るお付き合いしていただき感謝しております。会報を拝読して、卒業生の愛校心各分野でのご活躍が素晴らしい方々を多数輩出していらっしゃることに驚嘆いたします。

共通の問題ですが両校が男女共学になったことは大きな変革でありました。2年前に母校の(歴史と伝統を記念し更に限らない発展を願って)の主旨のもとに開催された創立90周年記念式典に出席したとき、学校主体の会ということで、受付から進行役、新校歌の混声合唱、その全てに男子生徒がいることが不思議なくらい自然で感動的な印象を受けました。共学化のモデルケースとして、県外からの見学者も多く、順調によりハイレベルの学校として、今年は初めての卒業生を送り出す安積黎明高校に誇りと期待がいっぱいです。が、しかし同窓会としてみれば、私達の母校はやっぱり“安女”なのです。安高は校名がそのままなのにと、羨ましく思いつつ“安女”が恋しいのが本音なのです。

この辺で本題の東京花かつみ会の活動について述べたいと思います。

現在会員は平成3年度の「高校43回

生」までの4300人ほど、年間行事として4月下旬から5月上旬の間に開催される総会は10数年まえから会場を明治記念館とし今年度49回目を迎えます。今でこそ組織もきちんと出来ており、名簿の管理も業者に委託してほぼ完璧ですが創設期に尽力された先輩の方々には改めて敬意を表す次第です。総会では、会務の報告、役員改選の時はその紹介、そのあと当番幹事が趣向をこらして企画したイベント(クラシックコンサート、踊りやダンス、講演会)などを堪能しそして恩師や友人とのおしゃべりを楽します。総会の案内も兼ねて発行する「会報」東京花かつみ会創立40周年記念号から表紙をカラー印刷にしましたので会員から募る絵画や写真がより美しく実物にちかい感じで見ただけのようにになりました。

11月には「幹事会」卒回ごとに2～数名の幹事がそれぞれの期をまとめ、会の運営について、総会へのお誘いなど、活発な話し合いが行われます。

今年の総会は5月8日、東京桑野会のお力添えをいただき、安高ご卒業の芥川賞作家玄侑宗久先生の講演会が実現することになりました。本当に有難うございました、今後とも変わらぬご指導をお願いいたします。終わりに桑野会の更なる発展をお祈り申し上げます。

会報25号を見て、 二題

海村 伍男 (58期)

I 悼まし、保土ヶ谷化学での犠牲
—その時私達は—

昭和20年4月の保土ヶ谷化学郡山工場動員生の空爆犠牲については伝え聞いていたが、会報25号に寄せられた入部さんの文より初めて実態を知った。難に遭ったのは、私達の一期下の諸君、会報に載った写真の幼なごの残る顔々が胸を搏つ。あらためて心から御冥福を祈る。

追悼を兼ねて、その頃の私達58期生はどうしていたかを簡単に御紹介したい。

私達は、昭和19年10月、4年生の秋、京浜地区の軍需工場(横浜・鶴見の日本電解製鉄所及び戸塚の東洋電機戸塚製作所)へ通年勤労働員で出勤した。

翌20年の3月には、9日の夜から10日の未明にかけて東京下町一帯へ焼夷弾爆撃があり、私達は鶴見総持寺の山の東側にあった日本電解八幡寮から、真っ赤に燃える東京の空を終夜眺めた。

3月の末には工場の寮において卒業式(4年の繰上げ卒業)があり、浜崎ガニさんがリュックに入れて持って来た、郵便はがき大の卒業証書をいただいた。

郡山保土ヶ谷化学の空爆被災は、4月12日だったが、私達3月に横浜で卒業した者の中、季節の勉学を要する農学関係への進学者(私も)は、4月はじめに学友を工場に残して、それぞれ進学先に向かい、残った者は引き続き7月まで工場に留まった。

今回、入部さんのお陰で、茫茫、実に60年前に想いを馳せている。

小型鋼船建造並に修理

廃水処理設備、環境衛生設備



京浜ドック株式会社

取締役社長 大内博文 (71期)

〒221-0022 横浜市神奈川区守屋町1-2-2 電話 (045) 461-6834 (代表)

齊藤徳太郎先生 のこと

小針 久 (60期)

前会報にて、水口副会長の寄稿にて、齊藤徳太郎先生について寄稿をとの事を見まして先生の薫陶を受けた者として、其の経緯などお知らせしたいと思います。

昭和17年入学した1年生の時には教わった記憶はありませんが、2年になりリーダー（所謂教科書の「クラウンリーダー」で習った覚えがありますが）の先生として教わりました。当時は大東亜戦争の開戦直後で、一般の先生方は、国民服やら菜っ葉服と戦時服装の中、先生には、髪もオールバックで、ズボンの折り目の筋がすっきりついた背広姿で、当時としては「キザ」と感じられた服装で勤務されていた様に思われます。

当時は英語は敵性語だなどとも言われて居りましたので、我々の発音もまともでは無かったのでしょうか。君達のは英語ではなく、「ジェー語か」などとも言われもしました。

その後3年となり（昭和19年）2学期より通年動員で学年は3つに分けられ、保土ヶ谷化学、日本化学、東亜航空（須賀川の笠原組紡績会社が海軍監督工場として転換）の3工場にそれぞれ動員され、私達水郡線通動組は、東亜航空に勤務することになりました。

昭和20年（終戦の年）に入り、4月より須賀川組は4年1組となりましたが、4月12日の郡山の空襲があり、同級生の六人の諸君の死亡や、その後8月の終戦前頃の艦載機に依る連日の空襲等、そして終戦となり学校に帰りましたが、その時点で、それまで組主任で指導されていた高橋先生に代わり齊

から来られたものとばかり思っていた。というのは、先生は郡山の訛りをお嫌いのように、それを英語の時間に強調なさり、郡山弁の安中生までお嫌いのようにであった。ために私達は、先生の前では萎縮してしまう傾向にあったことが否めない。

特に私は、郡山よりも訛りが強い須賀川の奥の片田舎の出なので、先生に接するたびに劣等感に苛まれたものであった。それは、後年見聞きすることになる、東北出身の青年が訛りをからかわれて劣等感に陥り寡黙になってしまふことに似た心境であったに違いない。

「…だからよオ、…んだつべ」などのきたない関東弁や相模弁（横須賀もそう変わりない）よりも、郡山弁の方がナンボか上品で情趣があると、今は思っている。

郡山地方弁で育った作家の久米正雄や中山義秀、もっと訛りが強い山形出身の文豪・高山樗牛などは安中出身なので、郡山弁の安中生が軽蔑されるいわれはないと心中ひそかに思っていたものだった。

先生の郡山弁嫌悪は、意思があつてのことだったとは思いたくない。2年から3年、4年と進むにつれて、安中生の優秀さを認められたのか、赴任当初ほどのことはなくなった。

また、先生は高識なお方だったが、生徒に対する躰の厳しさは、戦争一色の当時にあつて、配属将校や教練の教官のそれを上回る感さえあつた。

このように、先生の思い出というのはどうしてか、肝心の英語の授業のことはあまり覚えがない。これは弟子失格かも知れない。

ところで入部さん、あなた達昭和19年9月に4年生だったと書いているが、そのときの4年生は私達58期生で、あなた達は3年生だった筈だと申しておく。

II 「カンブラ」と「ノーベル賞」

— 齊藤徳太郎先生のこと —

同じく水口禎さんの「齊藤徳太郎先生の薫陶を受けた者の寄稿を待つ」との仰せに従い、昭和16年から同20年まで丸々4年間お教をいただいた一人として先生について語りたい。「師の想い出」なるものはたいてい「敬慕と讃仰」に満ちているものだが、この稿は、その期待に添えるものではないことをお断りしておく。

先ず、「カンブラ」の謎解きだが、そういう綽名の教練の先生がいたのでそれと関係があるのかと思って拝読したが、そうではなく、要するに「カンブラ」は、水口さんが「齊藤徳太郎先生」に思い至るきっかけになったに過ぎないようで、安積とノーベル賞を結びつけたいがための、牽強附会も甚だしいものではないか（水口さんごめんさい）。

さて、齊藤徳太郎先生が安積に赴任されたのは、私達が1年生の秋で、2年の初めから学年主任になられ、その関係で私達が4年になり学徒動員で京浜地区に派遣され20年7月に動員解除されるまで続いたので、安積における先生との師弟関係は私達が最も長かつたのではなからうか。

先生は英語の先生であつたが、国語というか標準語に執着され、とりわけ郡山弁に対する関心？が強かつた。

水口さんの調査で、先生は安積に来られる前には横須賀中学に長くおられたことを知ったが、当時私達は、先生は東京の山の手の標準語を使うところ

自動車、情報通信、医療・介護の分野で高品質のゴム製品を供給しています。



本社 〒330-0801 埼玉県さいたま市大宮区土手町2丁目7番2号 tel.048-650-6051 (代表) Fax.048-650-5201
大阪営業所 〒536-0016 大阪市城東区蒲生1丁目12番10号 京橋アドバンス21-205 tel.06-6930-2522
福島工場 〒969-0101 福島県西白河郡泉崎村大字泉崎坊頭窪1番地 tel.0248-53-3491 Fax.0248-53-3493

◇創業 1970年
◇資本金 4億7935万円
◇JASDAQ証券コード5162
◇ISO9001 認証取得
◇ISO14001 認証取得

取締役会長 伊藤 巖 (65期)
監査役 柳沼 晃 (65期)
顧問 中井惣吉 (65期)

藤先生が組主任となりました。

当時の学校は「学校工場」になっており、荒涼たるもので、我々が学ぶべき教室は何処にもなく、勉強など思いも依らず、毎日の様に、当時富田村にあった陸軍の111部隊に勤労奉仕で出勤させられて、建物内の清掃等させられて居りました。

20年の9月に入った頃だったか、郡山にも進駐軍が来ると言う事で、何日目かの日。斉藤先生より、組長と指名されている私に、本日、進駐軍の先遣隊が到着するが、君達は、掃除に行ったら「エキユスキュウズ、ミー、サーチ」（掃除をします）と言って仕事を続ける様にとの指示を受けました。暫くして、初めて見るアメリカ兵に接し、先生は通訳として、方々引っ張り回されて居られたようです。

その後、教室に復学した後でも「リーダー」の教えを戴きましたが、進駐軍が来た後は、他の先生方と共に通訳として、働かれて居られた様です。

我々の同期は、21年3月4年生で卒業する組（59期）と5年生に進む組（60期）とに分かれましたが、斉藤先生はその間に転任されたものと思われ、その後はそのまま忘却して居りました。

その後年が経ち、平成3年に入り、当時私は、単身で、茨城県東海村の日本原子力発電(株)東海発電所に勤務して居りましたが、私の長姉（元清水台郵便局長、鈴木要一（54期）の妻）より茶道の先生の仲間の方が、安積の斉藤徳太郎先生の二番目のお嬢様と言う事だが、貴方は先生を知って居るのかとの事でした。偶然訪れたご縁と思い、今どうして居られるか住所を聞き、平成3年5月先生のお宅を訪れました。

お宅は、東北線小山駅で乗りかえ、水戸線下館駅より5～6km入った開城町の古い部落にあり、鬱蒼とした林の

中の広い敷地の家の入口には、記念碑的な石塔があり、見た所、町の文化財になって居り、碑の文字には、鎌倉時代、元寇の調伏を祈願する碑である事が分かり驚きました。お宅に伺い先生にお聞きした所では、鎌倉時代の別当の家柄だそうで、敷地の外側の回りは当時よりの一族の屋敷との事で、今更ながら驚かされました。先生は、世が世なれば一族の本家の頭領と言う事です。当時は格式のある家で奥様とお二人で悠々自適の生活を送って居られました。

先生の容貌は、安積の頃とは一変して、好々爺と言った風貌に接し今更ながら経年の趣を感じました。

先生も当時の事は良く覚えて居られ、色々感慨深げに話されて居られました。此は余談になりますが、戦時中、安積の先生方の中で、自由主義思想あり、戦争非協力と言う事で、軍（配属将校）との「確執」有り、辞任させられた先生の事など、当時先生は部外者だったが色々有ったなあとも語られて居りました。

その後、先生との再会を願って居りましたが、翌年平成4年4月前記の義姉より、先生逝去の報に接し、葬儀に参列しました。

先生は安積より転出後、赴任された所は定かではありませんが、定年前には女子大学の講師として、ご自宅より東京まで通って居られたそうです。今思い出して、ご冥福を御祈り申し上げる次第です。

国の防衛

古川 清（63期）

イラクへの自衛隊派遣をめぐり国会やメディアで論議が活発化しているが、私は、昭和20年4月12日のB-29の空襲で保土ヶ谷化学郡山工場で安中4年生6人が死亡した悲劇を思い出した。彼等は勤労働員でその工場働いていたのである。

私は当時2年生だったが校庭には防空壕が掘られ、午前8時迄に空襲警報が鳴るとその日は学校は自動的に休校になった。学校自体、東芝の工場が疎開して来て工場になることが決まっております。旋盤、大型の変圧器などが運び込まれた段階で終戦になった。

それからもう半世紀以上が過ぎていく。幸い日本は平和に恵まれ経済も発展して生活も豊かになった。戦争中も戦後も食えることが大変だったが今はアルバイトだけで生活している若者が結構多い時代になった。時給1,000円で食うだけは食っていける時代なのだ。他方国民は平和ボケしてしまい国を守るという基本的問題がおろそかにされてしまった。戦争をおそれるあまり人は臆病になってしまった感がある。

私は現役時代多くの国を訪れ又外国に住む機会があったが、正直のところ日本人ほど国の防衛を呑気に考えている国は見当たらなかった。その意味で今回イラク問題を契機として漸くわが国で防衛論争が本格化したのは喜ばしい現象だ。

日本が平和ボケしたのは皮肉にも日米安保体制のお陰で米国の抑止力が睨みをきかせソ連などの脅威対象国が日本に手を出せなかったことにもよる。朝鮮戦争が起ったのはその直前米国が

小橋クリニック

院長 小橋主税（86期）

福島県須賀川市仁井田大谷地172-3
TEL 0248-72-1555

朝鮮半島を防衛範囲の外に置く発表をしたことがきっかけとなっている。金日成は韓国を取っても米国は助けに來ないと誤解したのである。ソ連の軍事力はわが国にとり大変な脅威だったがそれも崩壊した。ところが今度は北朝鮮が核開発を公言、IAEAの査察を拒否、その上ミサイルの開発を進め、既に配備済のノドン日本全土をカバーしている。その上化学兵器や生物兵器の研究も進めているらしいので物騒極まりない。主権国家に土足で上り込んで人さらいを平気でやった国である。日本は現在新たな脅威の下に置かれているのである。

この脅威に対抗するには矢張り米国の抑止力に頼るしか方法がない。日米同盟にゆりみが生ずれば日本自体の安全が危くなるのである。しかも2年前の9.11事件以後、国際テロ集団の暗躍という新たな脅威が加わった。国際テロ集団には抑止理論はきかない。抑止力で潰滅すべき国がないからである。国際テロは見えざる敵である。国際テロは民主主義全体の敵である。世界平和の敵である。もし国際テロが北朝鮮のような独裁国家と手を結ぶことになれば事態は極めて重大となる。国家としてテロに対抗するためには、ひるみを見せず断乎たる決意をもって国際テロを撲滅するとの意志を具体的な行為を以てテロリスト達に示すことが重要である。今回の自衛隊の派遣は正しくこのメッセージを伝えるためであり、二度と安中4年生の悲劇を繰返さない為の必要な措置なのである。吾々は臆病になつてはならない。リスクなしに国の安全は守れないのである。

新国民劇運動

中城 まさお (63期)

安積中学四年生の時、本館…現博物館二階の講堂で英語劇を演じたのが僕の演劇人生の始まりでした。その時出演、演出した旧友はみな社会で名の通る実力者になり、今でも親交を結ばせて頂いています。

話かわって、大正のはじめ沢田正二郎という俳優が「新国劇」という劇団を始めました。沢田、通称サワショウは早死にしましたが、島田、辰巳という後輩が引き継ぎ、長く人気を博しました。彼等の舞台は概して大衆演劇的でしたが常に「半歩前進」をモットーに新しい国民演劇を目指した事が人気を持続させたと言えるでしょう。私たちは彼等のように剣劇や股旅物をやるうとは思いませんが、今こそ新しい国民劇を必要とする時代が来たと思っています。海外の例ではアイルランド独立運動と連動した国民演劇運動、ドイツの疾風怒濤の演劇運動などが連想されます。

日本では戦後六十年、古典劇を別として、概して私的な瑣事や心理を掘り返す事に熱心で、社会や国民に影響を与えリードしようという覇気に満ちた作品が稀になりました。

新国民劇にふざわしい題材は『会津白虎隊』『坂本竜馬』など明治維新前後に多数ありますが、今年十月が神風特攻六十周年に当り、また来年が日本の悲劇的敗戦の六十周年に当るので、鎮魂、慰霊の意を込めてこらちを先行させようと思います。

戦時中郡山市上空にはつねに黄色い複葉の練習機が飛び交い、それは最終的には特攻の訓練をしているのでした。



私は神風特攻隊第一陣長関行男の伝記に出会い『散れ山桜』という映画シナリオにまとめました。以来友人知人の力を借りて映画化に努めていますがこちらは資金の問題で未だ緒に付きません。

戦後「特攻は軍国主義の洗脳のなせるわざ」という見方がはびこりましたが、これをもし洗脳呼ばわりするならこの世に自己犠牲の美德は存在しない事になります。

一方、例の9.11航空テロの際「カミカゼの再来」と報じた外国の報道機関があったようですが、婦女子を含む民間人をターゲットにするなどは、武士道に基く特攻とは遠くへだたりがあります。

私は若い頃『一人芝居全国キャラバン公演』という運動を行っていた事があるので『一人語り散れ山桜』の台本を書き上演をはじめました。こちらは早速反応があり、昨秋の靖国神社大祭で奉納公演をさせて頂いたほか各地で公演が決っています。

それらの活動を続けながら、頭記の「新国民劇運動」を企画し、その第一回公演として本格的な舞台劇『散れ山桜』を準備しています。多くの同窓生が応援して下さい、初演は郷里郡山になる予定です。さらに多くの同窓生のご賛同とご協力を得たく、衷心よりお願い申し上げます。

(劇作家・俳優・新国民劇準備会)

公認会計士 星 武典 事務所

ムアーズ・ローランド国際会計事務所所属

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 3-6 共同ビル (錦町三丁目) 6階

TEL 03-3291-8361 FAX 03-3291-8465

E-mail: takenori.hoshi@cac-cpahoshi.jp

星 武典(58期)

わが人生の よき出会い

谷本 滋朗 (63期)

【「にほんぼし」第99号
「新春随想」より転載】

自分の72年間の人生を振り返ってみると、まず戦争中の疎開がある。福島県の郡山にある安積中学にわずか2年間の疎開だったが、それまで東京の小学校で虚弱児のような自分が、心身ともに強くなったのは大雪の中を毎日往復3時間以上歩いた水郡線の汽車通学のおかげだと思う。配属将校の訓練もきびしかったが、殴ったり殴られたりしたことが今ではとても懐かしい。親しい友人には元東宮大夫古川清、元三井記念病院院長鶴沼君などがある。

疎開から都立九段高に戻って、慶応大学に入った。その大学では英語会のクラブに属し、クラブの部屋では毎日下手な英語で話し合った。そのときの友人たちはみんな立派になったが、現在は完全にリタイアしている。最近かれらに囲碁を指導しているが、彼らはとても熱心だがなかなか強くない。私は若いころから囲碁を覚えて本当によかったと思う。大学を卒業後、日本製粉という会社に入って秘書課長などをして17年間勤めたが40歳のとき脱サラ、税理士業を始めた。

50歳のときにたまたま三越のカルチャー教室へ絵画を習いに行き、絵の道に深く入り込んだ。その時期多くの立派な先生に同時に指導を受けたが、日展評議員桜田精一先生には強烈な影響を受けた。サラリーマン時代と人生観が180度変わったといえよう。特にかわいがってもらったし、一緒にスケッチ旅行にずいぶん連れて行ってもらった。桜田語録はたくさんあるが「遊び

心、創造性、美的感覚」「継続は力なり」などは私の座右の銘となっている。現在わが国はすべてにおいて希望がなくなっているが先生の生き方だけは受け継ぎ、伝えたい。

モンティセリというゴッホとセザンヌに強力な影響を与えた画家に出会い、惚れて、ライフワークとしてその研究を行った。モンティセリの展覧会を日本で3回、100年以上もどこにあるかわからなかったお墓も見つけだして修復し、マルセイユで鎮魂祭をおこなった。近代絵画の祖「モンティセリ」の本を自費出版した。

今から2年前の冬、囲碁の大会で全勝して、「俺はまだ満更でもない」と気を良くし一人で新宿歌舞伎町に行き、女の子のいる店で酒をがぶがぶ飲み、大声で好きな歌を歌ってご機嫌の午前様で帰ってきた。次の日にはインフルエンザが私を捉えたのがすぐわかった。それから二ヶ月の間病氣と戦いながら私は70歳という年のことを初めてしみじみと感じた。病床の中で「65歳以上の人がインフルエンザになると3分の1が肺炎になり、そのうち3分の1が死ぬ」ということを本で偶然知ってショックを受けた。

それまで自分の生き方は夭折の画家や自殺した三島由紀夫にあこがれ、「一生青春、一生勉強」を座右の銘とし、「俺は万年青年だ、俺の人生には寄せは不要だ」と公言していた。血液型がB型のためか自分で油絵を描いてもフォーヴが好きだし、囲碁の寄せやゴルフのパターの重要性はわかっていてもどうしても興味をもてなかった。その自分がインフルエンザの病床で手を合わせて神様に誓っていた。「もう二度と新宿へ行きませんから神様お願いします。あと5年、5年でいいです。生かして下さい。私には人生の寄せが必要な

です」と。

それから2年間神様との約束を守っている。生死とか健康とかについて常に考えるようになった。「一期一会」という言葉があるが、人生は出会いだ。思えば多くのよい人たちとの出会いがあった。囲碁、絵画、本との出会いも私には恵まれていた。インフルエンザとの出会いも今ではよかったと思う。税理士会でも木幡先生始め多くの人にお世話になった。今の自分には中村先生がお手本だ。85歳でゴルフと囲碁を楽しみ、現役でお酒も飲む。理想的な万年青年が身近にいると思う。それにしてもお世話になったなんと多くの人達があの世にいつてしまったことだろう。最後に思いもかけず「私の履歴書」と「交遊抄」を書く機会を与えてくれたわが編集部に深謝して筆をおきます。

(税理士)

安積時代の思い出

佐藤 一男 (65期)

昨秋、はからずも叙勲の栄に浴しており、福島県の新聞などからもいくつもインタビューを受けた。いろいろな質問の中に、安積時代についてのものもあった。懐かしい思い出をいくつか話したつもりだが、印刷された紙面を見ると「とにかく空腹だった」というくだりだけが書かれていて、何となくおかしかった。

私が当時の県立安積中学校に入学したのは、敗戦直後の窮乏時代で、食糧難も深刻であった。そのころは何しろ育ち盛り、食べ盛りの頃だったから、何時も空腹を抱えていたことは事実である。でももちろん、それだけが安積

弁護士 斉藤 英彦 (69期)

〒160-0022 東京都新宿区新宿1丁目3番8号
YKB新宿御苑804号室
電話 (03)3356-6677番
FAX (03)3356-6678番

財団法人 山縣記念財団
常務理事 増子 邦雄 (71期)

〒103-0026 東京都中央区日本橋兜町12番8号
谷本ビル4F
電話 03(5642)3130
FAX 03(3664)3188

伊豆秀雄歯科医院

伊豆 秀雄 (74期)

〒105-0004 東京都港区新橋六丁目二番八号
電話 03(3434)0231
FAX 03(3434)0085

時代の思い出ではないので、ここで弁解かたがた当時のことをいくつか述べてみたい。

私たちが旧制安積中学校に入学したのは昭和21年で、旧制最後の学年である。翌年には、安積中学校併設中学校、つまり旧制の中学校に併設された新制の中学の2年生になり、その翌年には安積高等学校併設中学校、すなわち新制の高等学校に併設された新制中学校の3年生になり、ようやくその翌年、安積高等学校の1年生になった。つまり、毎年、学校の名前が変わったのである。

この4年間、私たちは最下級生であった。当時はもちろん男子だけの学校で、バンカラを標榜するところがあり、ということは、上級生がいばる傾向があった。町で上級生にあった時に敬礼しないと、後で「説教」と称する制裁があり、これが中々怖いものだった。高校2年生になって初めて下級生ができ、これで少しいばれるかと思ったのだが、中学1年生と5年生ほどの差は高校1年生と2年生にはない。入学式で初めて顔を合わせたところ、どうも向こうの方が体も大きく強そうに見えて、これでいばれないなあといいに落胆したものである。

何しろ戦後の混乱のさなかである。教科書も満足になく、ノートや鉛筆などの文房具もそう簡単には手に入らなかった。制服など望むべくもなく、私も戦時払い下げられたダブダブの軍服を着ていた。しかし、それまで国民の頭上を覆っていた戦争の暗雲もなくなり、何より荒廃した国土を何とか復興させようという、国民共通の目標があった。

このような中で、今にして思えば、授業の内容は充実していたと思う。残念ながら生徒の時代には、その授業の

価値が分からず、言わば「馬の耳に念仏」であったことは、本当に悔やまれるところである。でも、いささか手遅れであっても、このようなことが思い出されるといっては、本当に幸せなことだったとしみじみ感じているところである。

(財)原子力安全研究協会理事

朝河貫一顕彰協会 設立発起人総会への ご案内

矢吹 晋 (70期)

今年は日露開戦100周年である。小泉内閣はイラク派兵を強行し、日本の進路をめぐって大きな議論が戦わされている。安積高校に学んだ者としては、ここで否応なしに先達朝河貫一(1873~1948)を想起しないわけにはいかない。朝河は日露戦争の前夜『日露衝突』を書いて、日露戦争の世界史的な意義を違意の英文著書でアピールするとともに、その骨子をイェール大学の雑誌 The Yale Review に寄稿した。私はかつて日露戦争に対する朝河貫一の所説を『ポーツマスから消された男一朝河貫一の日露戦争論』と題してまとめたことがある(東信堂、2002年)。朝河の偉大な事業を顕彰することの必要性については、かねて識者の間で語られてきたが、このような思いがひとつにまとまり、ついに朝河貫一顕彰協会発起人総会が目前に迫りつつある。

昨年初夏に始まった具体的な動きは、6月11日、7月30日、9月13日の3回にわたる準備委員会(いずれも安積歴史博物館にて)を重ねて、秋11月1日郡山市ホテルハマツにおいて、朝河貫一顕彰協会の設立準備会までこぎつけた。

われわれ準備委員会のもくろみとしては、朝河貫一設立発起人総会の開催を鋭意準備中である。すなわち2004年(平成16年)5月22日(土)午前11時00分~午後2時30分ホテルハマツ2F(120席)会場で開催すべくもろもろの手筈を整えている。なお「朝河貫一顕彰カレンダー2004版」(1部2,000円)はまだ在庫がある。お申し込みは福島リビング新聞社(960-8101福島市上町6-38福島テレビ第二会館3階、電話024-524-0871)までお願いしたい。

ちなみに出席者は、委員長矢吹晋(横浜市立大学教授・安積70期)、副委員長(代理)丹治勇(安積桑野会幹事長)、顧問柳沼八郎(弁護士・安積50期)、今泉正顕(安積歴史博物館館長)、郡山地区顕彰協会須佐喜夫(郡山稲門会会長)、本田哲夫(郡山稲門会幹事長)、須賀川地区顕彰協会柿沼良訓(須賀川桑野会会長)、二本松地区顕彰協会佐々木道昇(二本松稲門会幹事長)、後藤宏迪(二本松桑野会幹事長)、本宮地区顕彰協会高田宗彦(本宮桑野会前会長・安積70期)、福島地区顕彰協会伊藤司(福島地区顕彰協会会長)、高城勤治(福島地区顕彰協会副会長・福島早稲田会会長)、三浦正巳(福島地区顕彰協会副幹事長)、武田徹(福島県国際交流の会会長)、安積高校廣瀬涉(校長)、松浦健二(教頭)、福島県知事公室鈴木義仁(政策調査グループ参事)、事務局榎澤修一(福島テレビ専務・安積72期)、渡辺剛(東日本学院代表・朝河貫一研究会)、冬室保秋(福島地区顕彰会幹事長・安積72期)、藤原孝雄(福島地区顕彰会・立子山地区責任者)、仲村哲郎(安積歴史博物館学芸委員)、以上22名であった。

(横浜市立大学教授)

株式会社 櫻井淳計画工房
代表取締役 一級建築士
武蔵野美術大学非常勤講師

櫻井 淳 (78期)

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町29-24-707
TEL 03-3462-4161~2
FAX 03-3462-4163
E-mail:spajun@bk.iij4u.or.jp

Director's

編集長 渡邊龍一郎 (81期)

watanabe@hq.cri.co.jp
携帯:090-2149-7644
株式会社クリーク・ランド・リバー社
Director's MAGAZINE編集部
〒107-0052 港区赤坂7丁目3番37号
カナダ大使館ビル2F
TEL.03-5474-3480
FAX.03-5474-3478
http://www.broadne.or.jp/magazine/

東洋大学社会学部講師

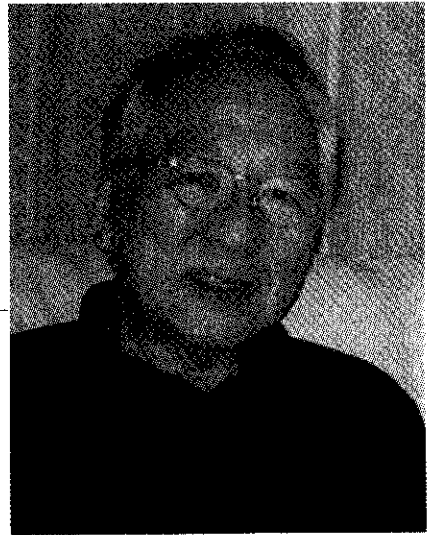
丹治 則男 (81期)

〒231-0033 横浜市中区長者町2-5-18-607

湯浅譲二 (60/63期)

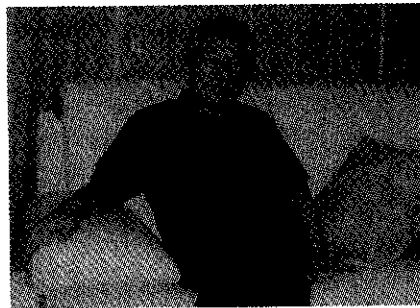
interview ①

東京桑野会ホームページより転載



作曲家

〔略歴〕1929年福島県郡山市生まれ。少年期より音楽活動に興味を覚え独学で作曲を始める。49年慶応義塾大学医学部医学部教養課程に入学。在学中より秋山邦晴、武満徹らと親交を結び、51年「実験工房」に参加、作曲に専念する。以来、オーケストラ、室内楽、合唱、劇場用音楽、インターメディア、電子音楽、コンピュータ音楽など、幅広い作曲活動を行っており、国内はもとより、世界の主要オーケストラ、フェスティバルなどから多数の委嘱を受けている。これまでニューヨークのジャパンソサエティ、DAADのベルリン芸術家計画、シドニーのサウスウエールズ音楽院、トロント大学など世界各国からの招聘を受け、また、ハワイ、香港、英国、アムステルダムなどでゲスト作曲家、講師として参加するなど、国際的に活動している。81年から、カリフォルニア大学サン・ディエゴ校教授（現在名誉教授）を務めたほか、現在日本大学芸術学部客員教授、東京音楽大学客員教授を務めている。98年より武満徹の後任として、「サントリーホール国際作曲委嘱シリーズ」のアーティストックディレクターを務めている。主な受賞歴は、ベルリン映画祭審査特別賞/1961、イタリア賞/1966・67、サン・マルコ金獅子賞/1967、尾高賞/1972・88・97、日本芸術祭大賞/1973・83、飛騨古川音楽大賞/1995、京都音楽賞大賞/1995、サントリー音楽賞/1996、紫綬褒章/1997、恩賜賞/1999、日本芸術院賞/1999などである。



—先生のことをインターネットで検索したら、童謡を32曲も作られたことを知り、親近感を覚えました。「インディアンがとおる」や「ピコットさん」は私が幼稚園生時代に口ずさんだ歌だし、「走れちょうとっきゅう」も小学校低学年時に歌った記憶があります。

湯浅：2004年3月に「インディアンがとおる」など26曲が収録された楽譜集『美しいこどもの歌』が音楽の友社から出版されます。また、CD製作の話も進行しています。

〔校歌や社歌なども38曲。福島県内の12曲の他、東京都内、千葉県、岩手県、埼玉県、静岡県、徳島県などの学校や団体の依頼を受け作曲。そして、ラジオやテレビドラマの音楽、映画音楽や室内楽、合唱、劇場用音楽、前衛的なインターメディア、電子音楽、コンピュータ音楽まで手がけ、その活動範囲の広さに驚く。〕

—先生は1947年に旧制安積中学校を卒業（60期）され、49年に新制安積高校を卒業（62期）と、2度安積を卒業されていますね。

湯浅：当時は、旧制中学から新制高校へ学制が移行する端境期でして、大学予科がなくなり、新制大学進学準備のために、旧制中学卒業後新制高校3年に編入する者が少なくありませんでした。

—安積在学中はどんな生徒でしたか。当時の学校の様子もお聞かせください。

湯浅：生物や幾何は得意でしたが、代数が苦手でした。音楽はもちろん得意科目でした。音楽の先生は東京音楽学校（現・東京芸術大学）卒でしたが、旧制中学1、2年時の音楽の時間は歌を歌うことが大半で、楽器を演奏する機会などまったくありませんでした。当時から質実剛健・バンカラ気質だったので、作家が誕生する土壌はあっても、音楽家は輩出しにくい環境でした。でも、新制高校3年生の時に私が音頭をとって、総勢20人で合唱部を創ることが出来たのはできたのはいい思い出です。安高の校歌を合唱用に編曲したのも、当時の私です。楽譜が残っていないのが残念ですが。

—安高卒業後、慶應義塾大学医学部に

進学されたということは、当初は医師志望だったということでしょうか。
湯浅：湯浅家は江戸時代の漢方に始まり、蘭学、ドイツ医学と6代続く医師の家系です。医師という職業が身近なものだったのです。父大太郎（27期）や兄恭一（54期）、は内科医ですが、私は外科医になろうと思っていました。

—なぜ医師にならずに音楽の道に進まれたのでしょうか。

湯浅：父の影響が大きかったと思います。父は英語・ドイツ語に堪能で、本業の医学ばかりでなく、文学・芸術・建築にも造詣が深かったのです。父はドイツ留学の4年間、オペラをよく鑑賞したそうですし、オペラ座の舞台の様子を克明にスケッチしてきました。また、バイオリンやマンドリンを弾いたしなみもあったのです。私も父がドイツで買い込んだレコードでワーグナーやストラビンスキーなどを聞いて育ちました。

小学校6年生の時に書いた「将来の夢」は、医者、映画監督、建築家とあり、家業の医者以外は、何かを創る仕事に興味があったようです。科学者で、芸術家でもあるレオナルド・ダ・ビンチに憧れていました。年を経るにつれて音楽に対する興味がどんどんふくらんでいきました。父も自分の趣味の範疇にある私の才能を認めてくれて、私が音楽家の道に進むことを理解してくれました。

—当時としては文化的なご家庭という印象を受けますが、他に思い出はありますか。

湯浅：幼稚園の頃には、家にあったオルガンを弾いていました。寒い冬の日も、かじかむ手足をさすりながら毎日飽きもせず2時間位弾いていたそうです。小学校4年生の時に我が家にピアノが入り、最初は母音校に手ほどきを受けました。母は、当時としては進歩的な大阪の女学校で音楽教育を受けたので楽譜を読むことが出来たのです。

また、家族で4部合唱をすることもあり、自然と音楽に親しんでいました。

—音楽家としてスタートした時はどのような時代でしたか。

湯浅：慶応大学を中退後、「実験工房」

というグループに入って活動を開始しました。室内楽の仕事を手始めに57年頃からラジオ番組、そして、テレビの一般家庭普及にともない、60年（昭和35年）頃からテレビ番組の仕事もぼつぼつと増えてきました。

童謡の作曲が続いたのもその頃からです。

—若い頃どういう音楽家をめざそうと思いましたが、また、思い出深い仕事は。

湯浅：今までである分野は踏襲せず、新天地を切り開こうと思っていました。電子音楽を手がけたのは1963年で、1967年には「ホワイト・ノイズによるアイコン」の仕事で、多チャンネル再生の音楽に取り組みました。当時としては最先端の分野です。これは、スピーカーを星型に並べて音声を出力するので、NHKでは66年に実演したシュトゥックハウゼンの「テレムジーク」が最初です。私はさらにもう一步踏み込んで、5台×5=25チャンネルで、聴衆を5方向から包み込んで音が動く仕掛けをしました。これは、世界中でどこにもない画期的なものだったのです。その後のYチャンネル再生は全体に音声移動しているに過ぎません。

—大学で教鞭をとられるようになったきっかけは何ですか。

湯浅：私の業績が認められるようになった結果だと思います。1970年にハワイ大学のサマースクールで現代音楽の講座を受け持ったのが最初です。その後、72年に管弦楽作品「クロノプラスチック」で尾高賞（オーケストラ部門の表彰としては国内最高の賞）を受賞してから、東京音楽大から声がかかって非常勤講師を務めるようになり、81年から94年まではカリフォルニア大学サン・ディエゴ校の教授を務めました。この間、日大芸術学部からも熱心に誘われ、帰国後は日大と東京音大の大学院、および岡山県の作陽大学音楽学部で作曲を教えています。

—今一番関心をもっている分野についてお聞かせください。

湯浅：オーケストラは、まだまだいろいろなことができると思っています。また、言葉と音楽の関係についても大

変関心があります。なぜならば、言葉は音響の組み合わせでできているからです。これはパロールとって、話し言葉です。少し専門的な話ですが、文字言語に対して発声言語の分野です。意思伝達の過程で言葉の意味と併行して、声のテンポや音程の強弱によって表現されるものがあつたり、音響（表示記号）そのものが表示内容を持っている場合があります。擬声語や擬態語がそうです。例えば、「さらさら」とか「ぱつたり」という語感でイメージできるものがあります。また、芭蕉の句で「枯れ枝にからすのとまりけり秋の暮れ」は、「か行」の多さで晩秋の冷たさや澄んだ感じを出しているし、「梅が香やのつと日の出る山路かな」という句でも「のつと」という語感でふくらむイメージがあります。発音自体が音響そのものなのです。

—安積を卒業してから、同窓生とのつきあいはどうでしたか。

湯浅：読売新聞の論説委員で「編集手帳」を執筆していた門馬晋君や公認会計士の星武典君、俳明電舎研究所の小針幸男君などとたまに会っては、それぞれの近況を報告しながら、励まし合いました。

—最後に安積の後輩たちにひとこと。

湯浅：「志を高く持て！」野心ではなく大志を抱けということです。誰もやらなかった分野に果敢に挑戦する姿勢をもってほしいですね。

（インタビュー・91期 西田幸雄）

先生のお宅を訪ねる時、道に迷った私を玄関先の路上で待ち受けていた人に見覚えがあつた。母校安積で教鞭を取っていらつしやつた英語科の松尾昌一先生（69期）だった。先生のお宅に入ったところ、日本史の仲村哲郎先生（66期）もいらつしやつたので2度びっくり。何でも、安積の120周年記念講演を依頼に来ていたのだという。くしくもこの日は先生にとって、安積を回想する日になったようである。

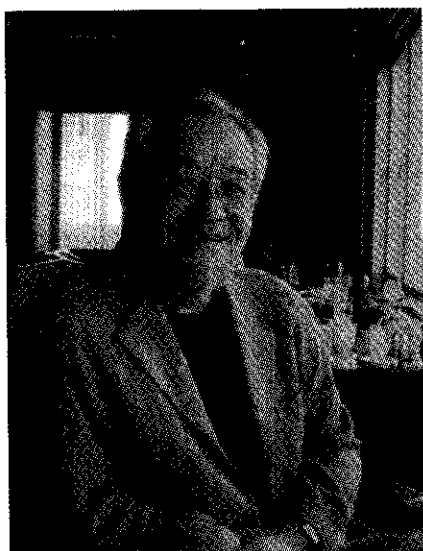
先生のお嬢様は医師、ご息子は画家だそうである。おふたりともすでに独立されているが、家族が揃うと芸術や医学などで談論風発されるとのこと。湯浅家の伝統は脈々と受け継がれている。

塩谷哲夫(71期)

interview ②

東京桑野会ホームページより転載

東京農工大学名誉教授／農学博士



下駄通って安積高校

塩谷(敬称は略させていただきます):私の生家は、いまはデパートの「うすい」がある所がありました。そこから戦災で赤木町に疎開、その後さくら通りに引越しました(郡山二中)。そして、3年生の2学期まで安高まで徒歩で通っていました。履き物は、もちろん白い鼻緒の朴歯の高下駄でした。冬でも足袋などはかず素足のままで、まあ安高はバンカラでしたからね。

名物先生と言えば、一年生の時に担任もして頂いた「柳沼弥重」先生が心象的です。「弥重」先生は別名「野獣」で、名は体を表すというか、安高生は物事の本質を見抜いてうまいこと言うというか。先生はとても安高を愛していた方ですね。弥重先生の母校は東京農工大学で、私が後年、東京農工大学の教授となったりしたので、先生が亡くなられるまで、大学農場で作った正月モチや野菜などを贈ったり、手紙のやりとりとか交流がありました。

きましたよ。高校時代は勉強が主だったので、大学に入った時には、アメリカカンフットボールをやりたくて、部のドアを叩きにいったんだけど、その部屋に向かう途中に学生運動用の立て看板つくっている人達がいて、私は絵がうまかったのでちょっと描いてやったら、その活動に入っちゃった。

—時代は60年安保に向かう混沌とした時代でしたね。学生が大きな社会的役割を持っていました。

塩谷:それで当時「帰郷運動」というのがあって、東京に出てきた大学生が故郷に帰って、国のあり方を考えるっていうのがあってそれに関った。大学の先生を郡山に呼んで講演会や集会をやったりしました。戦争が終わり高度経済成長期に入ろうとした日本の、新しい国の枠組みを作っていこうという大変な時代でした。日本の将来を真剣に考えましたね。

朝河賞と環境農学

—大学で農学を専攻されましたが、

それはどんな理由ですか?

塩谷:当時の理科二類は、生物系という大きなくりで、医学部や理学部、農学部バラバラに行った。子供は生き物が好きな割合が多いと思います。私も生き物が好きで生物系に進みました。専攻を選ぶ際には、医学部、理学部という選択肢もありましたが、社会運動を行った経験から、社会に密

勉強、恩師、大学時代

—弥重先生は、安積の名物教師の一人ですね。卒業後も何十年も交流が続くなんて、とても素晴らしいことですね。安積の素敵なおところですね。ところで、部活や勉強は?

塩谷:勉強は一生懸命やりました。当時は理系文系の区別は、なかったんじゃないかな。部活は特にはやりませんでした。野球の応援なんかは良く行

(略歴) 昭和15年2月生まれ。金透小学校、郡山第二中学校から安積高校へ。安積高校卒業後、東京大学理科二類入学、東京大学農学部農学科卒業。東京大学助手(昭和38年~42年)、農林水産省試験場勤務(昭和42年~56年)を経て、農林水産省農業試験場(中国農試および北陸農試)研究室長および総合研究チーム長。平成2年、東京農工大学教授、農学部付属農場長、大学院国際環境農学専攻教授。平成15年3月、定年退官。

接に関する分野ということで、農学部を選んだ訳です。

——ところで塩谷先輩は安高卒業時に、朝河賞を受賞されたとか。

塩谷：朝河賞というのは、私の代が第一回なのだそうです。橋牛賞、新城賞は既にあったが、朝河賞が加わった。私は卒業式には、受験のために出られなかったの、母が代理に賞状と記念品を貰いに行きました。私は朝河賞を頂いたこともあり、朝河貫一のことを頭にあり、いろいろと本を読んだりもしました。朝河貫一は、「国家はその国民が人間性（ヒューマニズム）を持っている限りにおいてのみ、自由な独立国である。しかし、政治体制が民主主義の組織をそなえているというそれだけでは、自由な独立国とは言えない。自由主義にあつては、その国民が世界における人間の立場を、すべてにわたって意識するまで進歩しているかどうか、それこそが重要である」と言っています。

高校生から大学生になり、そして年を経るにしたがって、そのような考え方の素晴らしさを実感し、自分の実践として農学研究ということを人生として取りくんだのです。社会との関わりの中で、仕事をしたかったのです。

——先生の東京農工大学での専攻は、「国際環境農学専攻 持続生物生産技術」とありますが、どのような学問分野なのですか。

塩谷：私は農場長でもありました。私は「フィールドサイエンス」が専門とっています。農学の分野では、英語で表現するとAgronomyというのがあります。日本語では適当な訳がありません。日本の農学は細分化されすぎているくらいがあり、農業を総合的な市やでみるということがあまりできない。私は、Agronomyというものが総合農学的なものではないかと思ひ、それを発展させて環境と農業を総合的に考える環境農学というのを指向しました。その例として、私自身としては印象的な仕事の一つである、ブラジルのセラード開発があります。

セラード開発

ブラジルのセラード地域というの

は、広大な面積を持つ痩せた草地だったのです。降水量もあり温暖であることから、農地としての利用が期待されました。世界の食糧のことを考えると、タンパク質の供給を図ることが大きな命題です。そこで、1980年代にはセラード地域をタンパク質供給地域にしようとして、ダイズ栽培を成功させようと世界的なプロジェクトが動きまわりました。

日本政府もそれに協力し、私は農水省の専門家としてそれに関わりました。様々な専門家、例えば土壌とか、昆虫とか農薬とか、ですね。しかし、その細かな専門性を統合化するような人がいない。私は色々な専門を統合化して、全体のシステムとして大規模なダイズ栽培システムとして確立するという役割を担いました。そして現在では、ブラジルは世界第2位のダイズ生産を誇るようになるなど、セラード地域は世界のタンパク質生産基地として大きな役割を担っています。このような仕事を通じて、環境、農学、国際的視野などをキーワードに環境農学に取り組み、フィールドサイエンスとしての重要性を追求してきたのです。

同窓生との不思議な縁

——朝河賞が深く人生に関わっているなんて、うらやましい限りです。ところで、安高卒業後に同窓生との交流はどのようなものがありましたか。塩谷：東京桑野会の副会長の増子君は同期だし、いろいろ同窓生と交流はありますね。前に述べたようにブラジルでの仕事に長年関わっていますが、それに関してとても印象的なことがあるのです。安高の同期生で、ブラジルに移住として渡り頑張って立派にやっている鈴木耕治君という人がいます。私がブラジルの関係で講演会で話をしたとき、鈴木君の子供が私を訪ねてきたのですよ。その息子さんは日本の大学にブラジルから留学中で、ブラジル関係の講演会で私が話した時、私の経歴を聞いて、もしかして自分の父親と同窓ではないかと思って訪ねてくれたのです。それで私も5年前にブラジルを訪れた時、鈴木君をトメヤスという町に訪ねました。約40年ぶりの再会でした。東京桑野会報や、安積の校歌応援歌を納めたCDをおみやげに持って行きましたが、大変喜んでくれました。

——お話を伺っているだけで、感謝してしまいます。安積の絆というのは、本当に強いものですね。

塩谷：本当にそう思います。

——最後になりますが、現役の安高生や将来の安高生にメッセージをお願い致します。

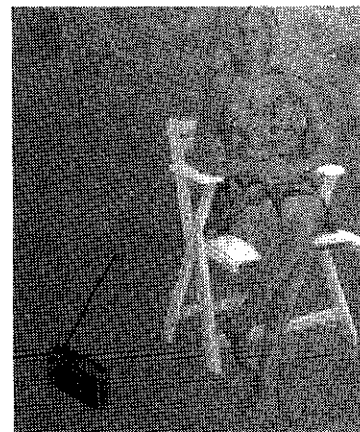
塩谷：人に言われてどうこうするのは自分も好きじゃないので、あまり仰々しくとらえてほしくないですが、私の父親が私に言った言葉が今でも心に残っているので紹介しますね。父の言葉は、「勉強と飯を食うのは、人に遠慮することはない、みんな身についてゆくものだ。若い人達には、大きな可能性があります。自分でやりたいことをすればいい、目一杯やればいい。そう思います。

——大変ありがとうございました。

〈インタビューを終えて〉

塩谷先輩は東京農工大学を退官後も、全国拓殖農業協同組合連合会（JATK）の農業技術普及交流センター所長として活躍され、また農・食・地域活性化のコンサルタントとしての仕事を行い、さらに東京農工大学名誉教授として自主ゼミを開講されたり、活動の幅を広げていらっしゃいます。ご健康に留意され、ますますのご活躍を祈念申し上げます。

（インタビューアー 91期・渡部良明）



電気通信研究所に 於ける 桑野会メンバーの活躍

大和田 允彦 (71期)

戦後の電気通信設備の復興は日本復興の最重要課題の一つであった。「電気通信省」、「日本電信電話公社」、「日本電信電話株式会社」(NTT)と変遷してきているが、目覚ましい成果をあげたのが、日本電信電話公社(電電公社)の時代であった。終戦時に数10万台程度まで落ち込んだ電話を1978年には3720万加入(現在約6000万加入)にまでに増加させ、長い間国民の念願であった「積滞解消」(電話加入待ちの累積)、「全国即時化」を達成した。さらに今は、日本の電気通信技術は「IT」、「携帯電話」及び「光ファイバ」などで世界をリードするまでになっている。一貫してこの発展を支えたのが国内で最大であり、世界でも有数の規模を誇る日本電信電話公社の「電気通信研究所」(通研)であり、その中に流れる「自主技術開発」の精神であった。

この通研でわれらが桑野会の卒業生が、電気通信の新技术の研究に、開発に、実用化にと大いに活躍したので、この機会に私の知っている範囲でご報告したい。現在、通研に入り、がんばっている若い卒業生もいると思われるが、ここでは述べないこととする。

約2000名の通研卒業生の中に、桑野会メンバー5名が含まれている。故橋本太吉氏(50期)、柳沼尚志氏(68期)、大和田允彦(71期)、森屋邦夫氏(75期)及び我妻誠氏(82期)である。橋本さんは東京大学理学部を出られ、通研では、電子管の陰極材料の研究、半導体全般の研究をされ、東名阪の長距離多重伝送を支える基盤及び日本の電

子工業の核となった超LSI技術の基礎を作られた。柳沼さんは東工大の化学を出られて、プラスチックの研究を行い、多重伝送線路の開発に貢献された。大和田は東北大工学部を出て、集積回路設計の研究及び通信用LSIの開発を行い、交換機、伝送装置のデジタル化、LSI化に寄与した。森屋さんは受動部品及び機器の実装の研究をされ、デジタル交換機、海底伝送装置等の実用化に貢献された。我妻さんは東北大工学部を出られて、光ファイバの研究を行い、現在の光ファイバ全国基幹網の実現に寄与されました。このように、システムよりも部品、材料のような基盤技術を研究、実用化する部門が多いのが特徴であり、安中、安高生の「先進の意気」と「熱誠」及び着実に物事を進める東北人の特質が現れていると言える。

今、IT、バイオ、ナノテク及びロボット技術等の開発が行われているが、この中でも多くの若い卒業生が日夜がんばっていることでしょう。この人々に対して、今までの経験からいくつかの提言をしたい。福島県出身の偉人である野口英世博士及び朝河貫一博士の世界を舞台にした活躍をみても同様なことが言えよう。

- 担当分野の世界における先端はどこにあるのかをきちんと把握し、早急にその先端に出る方策を採ること。
- 自分を表現する及び自分の成果を発表する等のプレゼンテーション能力を高めること。
- 自分の立っている位置より一段と高い立場からものを見るようにすること。

(株式会社光研代表取締役社長)

創立七十五周年記念 学校祭の思い出

國分 長次 (74期)

今から45年前に実施された創立75周年記念学校祭について書いてみたいと思います。私はその時、生徒委員でしたので、私としては思い出深い学校祭として記憶にのこりました。「安中安高百年史」を紐解きながら、その時のことを述べてみたいと思います。

昭和34年10月24日、学校祭の前夜祭として、仮装行列の幕が切って落とされました。実は、この仮装行列は5年ぶりに復活されたものだったのです。何かの都合で、過去5年間は実施されていませんでした。当時の生徒会長を中心として、75周年記念の学校祭なのだから、何か心に残るものを実施してみたいと言う気持から、顧問の先生の指導のもとにいろいろと議論を重ねました。しかし、仮装行列の場合一回中止されており、その復活はなかなか難しく、容易なことではありませんでした。今、安高生が華々しく仮装行列を実施している姿を新聞等で拝見するにつけ、当時を思い出すと共に、自分のことのように感じるのは、私だけではないと思います。ちなみに、長男は安高101期で、白雪姫になり、行列に参加しました。この白雪姫の写真をみた娘(私の孫)は、今幼稚園で白雪姫の姿になり楽しんでます。去る45年前の仮装行列の復活が息子や孫にまでつながっているのだなあと思うと実に嬉しい限りです。

改めて、この仮装行列の内容を百年史から引用してみたいと思います。「5年ぶりとなって沿道の見物人は約2万人という盛況であった。長さ延々と約1300メートルにも及んだ。通りの両側

超高速マルチセキュリティアライアンス製品の開発

株式会社 光 研

代表取締役社長 大和田 允彦(71期)

〒104-0033 東京都中央区新川2-22-2 新川佐野ビル5F

電話；(03)3551-8035、FAX；(03)3523-6844

メールアドレス；ohwada@duaxes.com

から終始テープや紙吹雪が飛び交い、その市民の歓迎ぶりは筆舌に尽くし難いものであった。」と記録されています。又、「この年は皇太子御成婚の年に当たり、時節柄それを反映した美智子妃の衣装や、鋭い政治批判及び社会風刺の衣装、さらには宇宙時代の到来を告げるべく、月のロケットのグシや全身黒に染めた土人の裸踊り、それに貫一・お宮や、お軽・勘平、『君の名は』の真知子と春樹が登場する恋愛歴史パレード等々、多岐にわたり趣向をこらした行列に、市民は盛大な拍手を送った。」と記されています。やはり45年前の衣装のテーマは当時の時代背景がありありであり、2004年の現代との差にその歴史を感じざるを得ません。

二日目の10月25日は、文化祭でした。クラス毎、又音楽部、演劇部など多彩な芸能祭が行われました。この中で、ジャズ・ポピュラー演奏会で『真夜中のブルース』が演奏されたのですが、我々の年代ならきつと多くの人たちの記憶にある曲ではないでしょうか。ドイツ映画で、真夜中に若い先生に恋をした高校生が、先生の下宿の窓の下でトランペットでせつなく奏するあのブルースの曲です。私にとっては生涯を通して愛すべき素晴らしい曲で、私の青春の思い出、高校時代の思い出の一つになっています。

紙面の都合上、あまり多くは書けません。中学生による弁論大会も学園祭に復活した一つでした。各部でのいろいろな展示や模擬体験等々、多種多様な催しが全生徒の手で実施されたものです。

このように、当時の高校生も熱き血潮に燃え、伝統ある安積の火を守ると共に、新しい歴史を作ろうと意欲に燃えていました。また、それが現在、延々と続いている姿を拝見するにつけ、

感無量なところがあります。ずっとずっと永遠に続き、発展することを心から望んでいる一人です。

今年、母校創立120周年にあたるのか。私の記憶を辿って45年も前のことを書いてみたのは退職した者の懐かしさを思う心と思っていたが、お許しを願いたい。経済の不況、自衛隊のイラク派遣、いろいろな犯罪等々心痛むことが多すぎますが、いつまでも暗いトンネルに入っていないと思います。何時かは、トンネルから抜け出し、明るい、平和な時が来ることを信じています。

安高OBの皆さん、健康に留意され、穏やかな中にも張りのある生活をされることを祈念しております。

(本宮町在住)

【注】 衣装行列が中止されていた——その理由について、当時を知る山川先生に74期のシマカゲルートで尋ねてみました。

「ハッキリおぼえていないなア…ただこれだけは確かだと思うのだが…」とのことで記憶の主旨は、行列が安女の校舎の前にさしかかると、わが安高生はなぜかパニックシンドロームが悪化し、いよいよ昂じて安女の校庭に崩れ込んだり校舎内にまで入りこんで大騒ぎをする。これを見兼ねた安女の校長が安高の佐藤校長に苦情を申し入れた。「なんとかなんねべか」と。

情報によると安女生がチョッカイを出すことも指摘されたが、ここではいさぎよく責任は我らにあり、と反省、衣装行列は中止と決まりました。

しかしそれではあんまりだという声に救済処置として、在校生が在校中に一回衣装行列に参加できるように三年に一回としたらどうかという

ことで中断状態になっていたらしい。

75周年当時は津口校長でした。仮装行列再開のお伺いをたてると「ハッハッハッハッ…やりなさい。」

津口校長は確か熊本出身でモッコス型の豪快さがありました。編集子が三年生の一月早々、校長室を訪ね「東京サ行って、絵の勉強をして、受験に備えたいので、学校を休みます。ですが…卒業はさせていただきます。」と頼んだことがありました。

その時も即刻、人一倍大きな声で「ハッハッハッハッ…行きなさい」でした。メガネのめが優しくほほえんでいたことを思い出します。

編集子

【注】 詰めの編集会議の折「安女に崩れ込んだのはオレチ69期だよ」と齊藤幹事長が「告白」しました。そのノンフィクションは「弥重先生」の「あさかのうたII」に詳しいとのこと。その項の大意“先頭の神輿組が酒をあおった勢いで安女の校庭に進入、余勢をかって校舎内に乱入した。後続もこれに従った。安女生は授業を放棄し窓から身をのり出して大喝采をした”。そして安女の校長は激怒。抗議を受けた安高の校長は更に激怒。弥重先生は校長に呼びつけられ四食付でミッチリお叱りを受けた。しかし乱入生徒は一過性といえども反省を促され“無罪”であったという。その時その歴史的瞬間に現場にいた当の齊藤幹事長は“オレは乱入しなかった”というので尋ねてみると、自分はお百姓さんの役で“本もののベコ”を引いていて“ベコをつれて乱入したらどうなるのかを考えると残念ながらジッと堪えていたのだ”とのことでした。以来“忍耐の齊藤”といわれているとか。

編集子

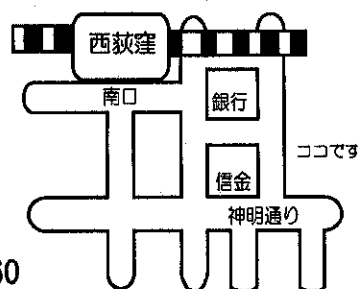
ギャラリー
絵画教室 たりま

〒1670053 杉並区西荻南3-7-3

T & F 03 (3247) 3052

JR西荻窪駅南口より徒歩3分

高松 ゆたか(74期)(自)03(3333)6660



★貸ギャラリー★

火～日曜日 [6日間単位]

11:00-18:00

・月曜日休館

★絵画教室★

手ほどきします

火・水・木曜日 月4回

各13:00/16:00/19:00

安積健男児としての誇り

増子 輝彦 (79期)

母校安積高等学校が創立120周年を迎えた。歴史と伝統をこれほど脈々と伝え守り続けた学校は、全国でも珍しいのではないだろうか。

私が在籍したのは、昭和38年4月から昭和41年3月の3年間だった。

我ら団塊の世代は、戦後のベビーブームの頂点であり、とにかく人数が多く、何をすることも競争が激しかった反面多くの良き友人に恵まれた。

私の安積時代は、野球に明け暮れた毎日だった。長嶋茂雄選手に憧れ、野球が大好きで野球漬けの高校三年間だった。今改めて振り返ってみると、あまり勉強もせず野球三昧の毎日を過ごした。残念ながら甲子園出場は果たせなかったが、野球を通じて多くの事を学んだ。チームワークの大切さ、頑張れば何とかかなる、ガッツの精神など…。35年後の2001年春、母校安積野球部は悲願の甲子園、春の選抜選手権大会に出場を果たした。「21世紀枠」代表だったが、後輩たちの甲子園でのプレーは立派なものであり、野球部OBの私だけでなく安積に学んだ全員が感動し、夢が実現した、喜びにあふれ安積の歴史に新たなページが刻まれた。

安積120年の歴史と伝統を築いてきた、多くの先輩と若い後輩の橋渡しの役割が私に与えられた使命と責任だと、自覚している。100周年の時には福島県議会議員として、今次120周年には衆議院議員として、歴史的節目の意義有る母校の名誉に立ち会う事が出来たのは、幸運なめぐりあわせである。

世の中は大転換期の中であり、改革と創造が求められている。

母校も2001年春から女子を迎え、男女共学となり、今春初の女子卒業生を送り出した。これもまた時代の流れであり、質実剛健の校風を守りながら、優美や品性の校風も創り上げていくことにより、安積高校が盛栄発展していくであろう。「紫の旗いくところ」を唄い、「凱歌」を叫び、いつまでも安積を卒業した誇りを持ち、安積の代表として政治の世界で「名誉やお金やポス

ト」の為でなく、国家・国民のために命を賭けて有言実行の政治家としての行動を貫く事が安積健男児である。

母校安積高等学校創立120周年を心から祝福し、一層の発展を祈る。

(衆議院議員)

映画美術監督 木村威夫氏の父は 大先輩

渡邊 龍一郎 (81期)

日本映画界でその人の名を知らない人はいないというぐらい超有名な美術監督がいる。

その人は木村威夫さん。

これまで美術監督として関わった映画は昭和20年代の日活時代を含めると211本、昭和30年、猪苗代辺りを舞台にした『警察日記』(久松静児監督)は懐かしい。

近年も黒沢明脚本『海は見ていた』(熊井啓監督)、『ピストルオペラ』(鈴木清順監督)等の作品は木村さんの才能を余すところなく伝えて必見である。

木村さんは大正7年東京恵比寿の生まれ、御歳85歳、バリバリの現役である。

大ベテランでありながら若い世代の映画関係者からも圧倒的な支持を集めているし若手の作品にも積極的に協力する姿勢はいまも若々しい。

美術監督はロケーションであれセットであれ映画の舞台設定や背景空間、美術に関するすべてを司る重要な役割を担っている。

一昨年木村さんの映画美術を一望に紹介する展覧会が「夢幻巡礼 映画美術監督・木村威夫の世界」と銘うって川崎市市民ミュージアムで開かれ話題になった。

私も平成15年当時毎週木曜に著名なクリエイターを招いてのフォーラムを主催していたので、そのゲストに思っていたこともあり展示会を訪ねたのだが、その折会場で購入した冊子を開いたところ、驚くことにそこには木村威夫さんの父(旧姓小松喜代子さん)は福島県郡山の出身とあるではないか。以下そのくぐり抜ける。

私の父小松喜代子が生まれたのは明治24年(1891年)4月13日である。(中

略)

喜代子の父は小松佐平とって福島県郡山の醤油問屋主である。(中略)

喜代子は幼時より神童といわれる程に絵がうまく、何人もその画道に進む事に異をとるものはない程のたしかさであったとか。

小学校を終えると郡山の名門校県立安積中学校に入学した。明治17年創立の質実剛健なる校風の学校である。それ故、卒業者は大抵地道な方向の人達であったが、先輩の卒業生には第1期生に高山樗牛がいた。第16期生には太田秋民という日本画家がいた。(中略)

明治42年春喜代子は卒業する。卒業順位は21期生である。

喜代子が卒業して美校に入学するのは翌年のことである。

又小説家の久米正雄の随筆「久米亭自傳」にも小松喜代子のことが記されている。

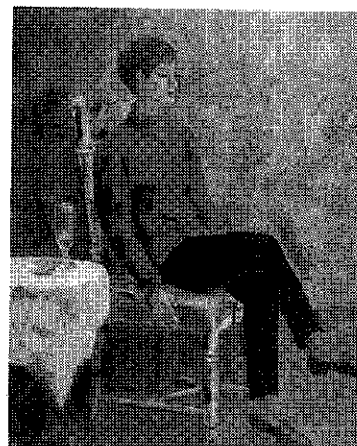
久米正雄は元来は洋画家志望で親友の小松喜代子とよくスケッチを共にしたり写生会を開いて俳句を作ると同じように水彩画にも熱中したとある。

以上抜粋は終わるが木村さんの父上小松喜代子さんはその後恵比寿にあった木村家の長女(貴美子さん)と結婚し木村家へ入籍したということである。

後日お会いした時に木村威夫美術監督の父上が安積の大先輩であることを確認したが、木村さんは「郡山はあまり行ったことがないのでなじみがないがあなたも郡山の人ですか」と感慨深げにおっしゃったのが印象的だった。

これまで縁遠くの方が急に身近に感じ人の縁の不思議さを感じたのである。

(株式会社クリーク・アンド・リバー社編集長)



政治活動を支える 「安積のこころ」

—母校創立120周年によせて—

根本 匠 (82期)

私が衆議院議員になったのは11年前。母校・安積高校の恩師、先輩、級友、後輩諸氏のご支援により、1993年7月の第40回総選挙で初当選を果たすことができました。

この選挙で自民党は敗北を喫し、野党からのスタートとなりましたが、1年足らずの野党経験は逆にプラスでした。野党の新人であるが故に質問の機会を数多く与えられ、国会の場で存在感を誇示できたからです。

1期目は、若さに任せ無我夢中で政治活動に取り組み、「政治家」らしくなってきたのは、2期目に入ってからです。

志を同じくする仲間と不良債権問題に取り組み、土地・債権の流動化を促す仕組みや金融再生のための総合的な政策を、われわれ若手議員が企画・立案、筆も執り、政府・与党を動かしました。

安倍晋三さん（自民党幹事長）たちと結成した「NAIS」の活動も本格化、厚生政務次官だった私が座長役を務め、年金や介護保険などの政策課題について積極的に取り組みました。

そして3期目。「理念先行型」から、目標としていた「政策実行型」の政治家への脱皮を果たし、ダイナミックに政策を展開しました。

「脱デフレ日本経済サバイバルプラン」などの政策提言活動に取り組む一方で、石原伸晃さん（国土交通相）たちと新政策集団「四騎の会」などを結成。「派閥・長老支配打破」や「世代交代・若手登用」などの党改革を訴え、こうした改革のうねりが小泉政権誕生の原動力ともなりました。

3期目の後半は、内閣府副大臣兼総理大臣補佐官という激務に忙殺されましたが、経済財政や産業再生など7つの改革に携わることができ、名実ともに「政策実行型の政治家」になれたように思います。

衆議院議員としての政治活動も連続4期、11年目に入りました。昨年11月には衆議院経済産業委員会の委員長に選出され、今国会において経済産業政

策や中小企業政策、エネルギー政策などの舵取り役を務めております。

わが国はいま、デフレ経済、少子高齢化の急進展、国家・地方財政の悪化という深刻な問題を抱え、繁栄か衰退かの「分水嶺」に差し掛かっています。

こうした政策課題への対応に呻吟している時、いつも安積に学んだ3年間を思い出します。重要文化財となっている旧本館の重厚な佇まい、人生の先輩として接しつつ「安積のこころ」を教えてくれた先生方、本心から語り合えた級友たち…。

120年という長く絶えることのない流れは、在籍した3年間という枠を超えて、私に力を与えてくれているような気がしています。

この素晴らしい安積、先輩方によって培われてきた伝統を後輩たちに伝えていこう。そう思った時、ふと私なりの答えが浮かび、形となってくるのです。

ありがとうございます、これからもよろしくお願いします。

(衆議院議員 衆議院経済産業委員長)

安積高校時代の 宝物

玄葉 光一郎 (96期)

「君の心の奥底に流れる“内に秘めたる闘志”をいつも感じてきた。」

担任であった君島整先生（現在県立橋高校校長）が当時の私に下さった言葉である。

朝7時船引駅発の磐越東線に乗り、郡山駅から学校までは自転車を漕いだ。授業の後は開成山競技場で陸上部活動。再び自転車と汽車を乗り継ぎ家に着く頃はとうに日は暮れていたかと思う。そんな日常であったが、正直言って授業を好きにはなれなかった。陸上競技の記録も思うように伸びなかった。いわば不完全燃焼の高校生活であった。

冒頭の言葉は、そんな悶々の日々を送っていた高3時代の成績表（通信簿）の担任コメント。先生ご本人はそのような言葉を記した事を覚えているはずもないし、もしかしたら私だけでなく多くの生徒に送った言葉なのかもしれない。しかし、この一言は、確実

に当時の私の魂を揺さぶり、後の私を大いに鼓舞し勇気づけた。高校時代の宝物である。

現在教育論議が盛んであるが、教育とは結局“出会い”に尽きるという論に賛成だ。良き教師との出会い。友人との出会い。書物との出会い。言葉との出会い。それらによって心＝価値観・人生観・死生観がどれくらいアップデートされたかであり、その前提は出会いを受け入れる心の姿勢ができていくかどうかだと思う。

言志四録の一節に「一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂うることなかれ。只一燈を頼め」とある。

人前で話すことが大嫌いであった私は、今なお大言壮語やパフォーマンスはできないが、「内に秘めたる闘志」で一貫した姿勢を貫き、歴史の評価に耐え得る言動を心がけたいと思う。

最後に紙上をお借りして、安積高校時代にお世話頂いた先生方、友人達に心からの感謝を申し上げたい。

(衆議院議員)

ホームページの 一年を振り返って

—1年間の活動と
アクセス状況実績の報告—

<http://www.tokyo-kuwano.com/>

芳賀 雅美 (86期)

昨年3月1日（土）正午にグランドオープンしました当会のホームページは、無事に1周年を迎えることができました。これもひとえに東京桑野会員の皆様のおかげと感謝しております。この1年間にホームページ委員会にて実施しました改訂・追加事項と、会員の皆様のアクセス状況につきましてご報告致します。

まず大きな改訂としましては、オープニング頁が挙げられます。当初はいきなり「紫の旗ゆく所」の男性斉唱と共に「安積の四季」のスライドショーを画面に展開させましたが、容量的に非常に重くなってしまいダイヤルアップ接続の会員から「開かない」とお叱りを受けました。そこで開設1ヶ月後には、選択メニュー式のオープニングページに変更しました。スライドショーや「校歌」「紫の旗ゆく所」等の重い

美は地球を救う

大場 基美雄 (92期)

昔々、人間は夜空の星や月を観照しては、「我々は何処から来て、何処へ往(逝)くのか?」と思索する日々を過ごしていたと言われます。いま都会では、大気汚染や高層ビルの乱立、職場と家庭を往復するだけの缶詰の日常生活の中で、星はおろか空さえ見上げる余裕もないのです。それではツキ(月)にも見放されてしまうでしょうね…。

そしてそれは、哲学や宗教、倫理学、物理学などの根本命題でもあります。人間は自己の生命や財産を投げ出してまで他人を救うことができると同時に、核兵器で無感情に大量殺戮を行いこの地球さえ破壊することもできる。だから哲学が必要、絶えず「何処から来て何処へ往くのか」の自問自答に迫られる。キリスト教は天国の門は紳士より娼婦の方が入り易いと説き、常識を疑えとの警句ともとれ、また紳士を男性や権力、娼婦を女性や芸術と置き換えれば良く理解できるかもしれない。「真善美」や「(金→)富→貴→美→社→法」とあるが、今日大抵の人間が生涯を賭けて追い求めているものはここにはない、つまりこれ以下である。

従って江戸時代にまで遡って観るのが良いでしょう。外国人の日本に対するイメージつまり富士・桜・芸者、花魁・サムライなどは浮世絵によって形成され、自然との共生やリサイクル、武士道、「宵越しの金は持たない」という浮世つまり金に支配されない人生観、身分はあっても差別のない平等社会観をもたらし、マネやゴッホ、ローレックなどのフランスの印象派の画家達に大きな影響を与え、彼らに印象主義は日本主義(japonism)だとまで言わしめたのです。印象派の先駆者たるマネは裸婦や娼婦を描いて画壇にセンセーションを巻き起こしましたが、芸者や花魁は浮世絵の華だったのです。ジャポニスムは大概日本趣味と訳されていますが、何故でしょう、大きな闇としか言いようがありません。

浮世絵は西洋史観に毒されない日本の史実を知るための歴史的資料価値を

コンテンツを選択項目とし、必要としない会員は直ちにメインメニュー画面に移動可能にしました。またブラウザ側の設定によっては画面構成の歪みが生じる、文字同士の重なりや画像と文字の重なりが生じる、という現象が発生していましたが、11月までに全て修正しました。

コンテンツの追加としましては、検証サイトを設置し、歌詞付きの校歌、「紫の旗ゆく所」を掲載。5月の総会の後には現役安高合唱部の写真を、また福島県の野球大会日程と結果の頁を掲載しました。会報のバックナンバーにつきましても12月末までに全てPDF化し、掲載しました。

さらに会員のご指摘により、当ホームページにおけるセキュリティポリシーとプライバシーポリシーを制定しました。常識的な範囲で当ホームページの運営に関する基準を設定したのですが、意外と好評でした。

また大きなコンテンツとしまして、「安積高校SSHの頁」と「母校創立120周年記念頁」を制作しました。SSHの頁は、東京桑野会として推薦しました各専門分野のOBが実施した授業を紹介するもので、今後も充実していきます。120周年記念頁は12月に立ち上げましたが、まだまだこれから内容のてんこ盛りを図ります。この記念頁につきましては、取材が命です。これまで協力を戴きました会員の皆様、ありがとうございました。また今後も更な

るご協力をお願いします。

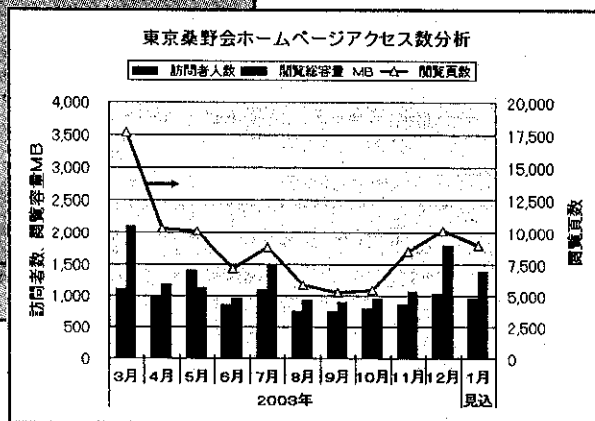
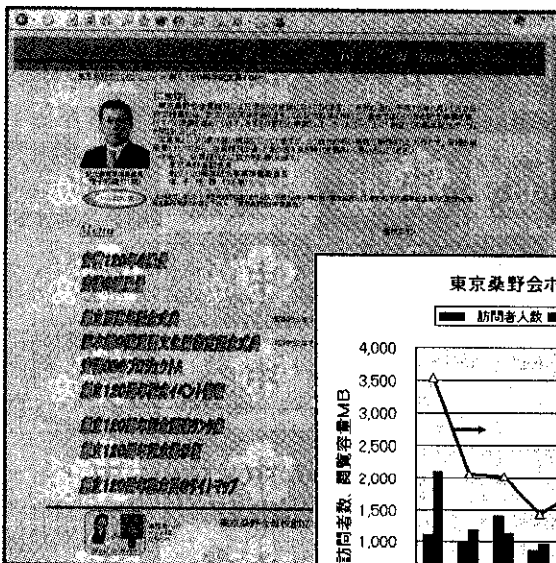
さて当ホームページへのアクセス状況ですが、この原稿を書いております1月までの経過をグラフで示します(下の図を参照:2004年1月は見込みの数値です)。訪問者人数は、1月13日(火)深夜に1万人を突破しました。2月上旬には、閲覧総頁数も10万頁を超える見込みです。

最も人気の高いコンテンツは掲示板でした。会員親睦の頁として4つ、事務局への要望・連絡用に1つの合計5つをセットしましたが、掲示板へのアクセス数は閲覧総頁数の25%にも及んでいます。中でも「同級生・同窓生・クラブサークル/わいわいトーク」の掲示板が最も人気が集中しています。次にアクセス数が多いのは、「紫の旗ゆく所」で「校歌」が続き、さらに「安積の四季(スライドショー)」となっています。老いも若きも、安積のOBはこれが好きですからね…。その次は会報のバックナンバーで、平成14年4月のNo.24号・平成16年4月のNo.16号(創立百十周年号)の順です。今後は「創立120周年記念頁」へのアクセス数が増えてくると思います。

今後とも会員の皆様のご期待に沿えるよう、充実したページ作りに励みたいと考えておりますので、なお一層のご愛顧をお願いします。

(東京桑野会ホームページ委員長 出光石油化学株式会社e-ビジネス推進部)

東京桑野会ホームページ、創立120周年記念頁(左)とアクセス数分析の表(下)



保存し、平成の世から日本を知るよりも江戸時代にタイムスリップして日本を学ぶ方がより正確で賢い方法だと思う。浮世絵によって意識が過去に遡ると、自然を愛で、勧善懲悪を主義とし、金や権力に執着しなかった自由闊達な日本人に戻り、そして若返るので。そこで日本人の誇りと自信を取り戻されなければ明日の日本はありません、既に経済二流、教育三流、芸術に至っては存在さえ定かではなく、外国人には日本の芸術家とは今以て「北斎、写楽、歌麿」なのです。芸術や文化からこそ真の教養、貴族の教養が学べるのです。金からはギャンブルは学べても経済つまり「経世済民」は学べません。政治や権力からは権謀術数や支配を学べても人間性は学べないのです。支配される苦しみに耐え抜いて得た結果は人を支配できるということに過ぎません。ですから、文化人になりたいと願うし、現実的に職業という生活の糧を得るための拘束もあるから、せめて文化的〇〇人でありたいと願望し努力するのが今の私であるし、そういう自分を一番喜んでいるのは実は高校時代の自分なのです。何故なら、人が人たる由縁は芸術にあるからなのです。

現在の自分を客観的に把握し、自己改革して更に進化するためには、自己を俯瞰的つまり三次元的に観なければならず、更に時間的には日本が世界に尊敬された江戸時代の意識にまで遡上して四次元体にならなければならない。そのための浮世絵は西洋の印象派、中国の磁器と並ぶ世界の三大美術品であり、美による真善の示現である。

だから私の浮世絵を安高生に見せたいし、創立120周年記念事業として浮世絵展を開催して男子生徒にも女子生徒にも見せてあげたいし、昨年度に文部科学省指定のスーパーサイエンスハイスクールに選ばれたことから、芸術による感性教育は車の両輪の如く必須であり、知的趣味や興味から原子爆弾のような物を造り出すような人間を育ててはならないのです。

第二次大戦後、バルト海に投棄された推定約4万トンの毒ガス弾などの化学兵器も弾殻や容器の腐食の問題からタイムリミットが目前に迫り、ジェーン年鑑や昨年(2007年)の毎日新聞にもその事実が掲載された。かぐや姫の物語やひこ

星とおり姫の天の川伝説にある様に月や銀河への旅を夢見てきたはずの人類は、邪(蛇)にそそのかされて自ら造り出した毒物を始末して、領土、経済紛争や宗教戦争で分裂し、国境という縄張りやチェスボードや将棋盤の様に切り刻まれたこの地球を、芸術によって人道的に統一し再生して、地球を代表する芸術作品をかぐや姫やおり姫に贈りとどける旅立ちの日を迎えることができるのでしょうか…。

(陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地業務隊付
筑波大学研究生)

スーパーサイエンス ハイスクール(SSH) について

渡部 良朋 (91期)

「スーパーサイエンスハイスクール(Super Science High School)に安積高校が指定された」というニュースを知ったのはインターネットでした。研究という仕事柄、教育関係や官公庁の方々と繋がりがあり、文部科学省が平成14年度からSSH事業を行うという話は聞いていました。そのSSHに母校が指定されたというのは、私にとっては21世紀枠で甲子園!というのにも匹敵するインパクトがありました(嬉しかったです!)

SSHとはなんぞや? 母校のHPには、「理数系教育を重点的に実施することにより理数系教育の改善に資することを目的としたものです。学習指導要領を越える学習指導など発展的な理数教育を実施します」とあります。理科離れが叫ばれる昨今であるからうんぬん、と一般的なイメージで語られるかもしれませんが、ちょっと違います。

近頃元気がない日本ですが、まだまだ世界有数の経済大国です。その国力を支える大きな柱の一つが科学技術です。科学や技術といった分野は世界が競争相手でありマーケットです。そこにどれだけ有為な人材を、今後も送り込むことができるかが、日本の将来を左右します。顧みて社会や教育の現場。理科系の人材を育てる環境は大丈夫? そこでSSHでは、能力のある子供達に優れた環境と機会を提供しよ

う、という事業を行います。つまり「教育の悪平等(様々な意味を含んでいる言葉です…)」から脱却し「重点投資」をするものです。

安積高校の歴史を振り返ると、福島県の中等教育において理科教育を牽引していました。84期から設立された理数科では、高校とは思えないような授業が行われていました。例えば、東京教育大学(現・筑波大学)の下田臨海実験所での特別授業など。理科棟も建設され、施設は県下随一でした。進学実績も、例えば86期の理数科では40名足らずのクラスから、東京大学に5名+医学部10数名というような実績も残しているそうです。

東京への一極集中で、今、地方は元気がない。福島県もしかり、です。教育の現状も残念ながら課題が多い。そんなところへSSH指定の朗報。先生方、生徒さん達が、アイディアを出し合い力を出し合い、この絶好の機会を生かすために、懸命の努力を続けていらっしゃいます。そこで、同窓会です。安高におけるSSH事業には、母校からの要請で東京桑野会が協力をしています。東京桑野会のHPには、その様子の一部が掲載されています(http://www.tokyo-kuwa.no.com/ssh/ssh_menu.html)。もちろん母校のHPにも(<http://www.asaka-h.fks.ed.jp/>)。

SSHで様々な経験を得た生徒さん達が、今後どのような人生を歩むのだろう。理科系の大学・学部に進む生徒さん達も多いだろう。大学で、他のSSHの卒業生と出会うかもしれない。その人達と切磋琢磨し、さらなる道を辿るかもしれない。そして、歳を経てから「なぜあなたは科学者・研究者・技術者になったのですか?」そう問われた時、「高校生の時母校がSSHに指定され、そこでの経験が原点になった」と答える…。私も科学者のはしくれですが、科学者としての原点は、安積のあの教室だと思っています。

* SSH指定校は平成14年度に26校(安積も含む)が指定され、平成15年度に26校が追加された。著名なところで、札幌北、高崎、宇都宮、岡崎、金沢泉丘、北野、岩国、修猷館、筑波大附属駒場、広島大付属、慶應義塾など。

(財)電力中央研究所 生物科学部長)

東京桑野会役員名簿 平成16年4月1日現在

□役員

役職	氏名	期	勤務先・自宅住所	TEL/FAX
会長	古川 清	63		
副会長	大津 隆	63		
副会長	水口 禎	67		
副会長兼幹事	斉藤 英彦	69		
副会長	増子 邦雄	71		
副会長	高松 豊	74		
副会長兼副幹事	櫻井 淳	78		
副幹事長	丹治 則男	81		
副幹事長	渡邊 龍一郎	81		
副幹事長	村上 昌弘	85		
副幹事長	坂本 浩一	86		
会計監査	川井 栄一郎	65		
会計監査	近内 靖夫	69		
顧問	高瀬 禮二	46		
顧問	吉田 弘俊	52		
顧問	竹花 則栄	55		
顧問	星 武典	58		
顧問	小浜 精吾	58		



□幹事

役職	氏名	期	勤務先・自宅住所	TEL/FAX
幹事	佐藤 義重	50		
幹事	撞井 保夫	51		
幹事	小宮 茂	53		
幹事	佐久間 盛政	54		
幹事	結城 洸	55		
幹事	石川 衛三	57		
幹事	池田 和男	58		
幹事	小針 久	59 60		
幹事	佐藤 啓	61 62		
幹事	村山 俊司	61 62		
幹事	鵜沼 直雄	63		
幹事	谷本 法朗	63		
幹事	渡部 喬一	64		
幹事	宇田川 保夫 (本田)	64		
幹事	佐藤 司	64		
幹事	伊藤 巖	65		
幹事	清治 和昭	66		
幹事	橋本 大三郎	66		
幹事	横尾 稔	66		
幹事	遠藤 修	67		
幹事	伊藤 泰昭	68		
幹事	青山 掌三	68		
幹事	有我 政彦	68		
幹事	佐藤 廣	69		
幹事	石井 敬治	70		
幹事	矢吹 晋	70		

東京桑野会会長
古川 清 (63期)

祝 創立120周年
東京桑野会顧問
吉田 弘俊 (52期)

〒108-00263 東京都港区芝浦二丁目11番7号
電話 (03) 3455-0005

小浜 精吾 (58期)

旧 (本宮通学団)

役職	氏名	期	勤務先・自宅住所	TEL/FAX
幹事	渡辺 哲弥	70		
幹事	武藤 勇司	71		
幹事	大内 博文	71		
幹事	大和田 允彦	71		
幹事	遠藤 征志郎	72		
幹事	遠藤 宏司	72		
幹事	菅野 一雄	73		
幹事	関根 健治	73		
幹事	武藤 一駿	74		
幹事	伊豆 秀雄	74		
幹事	今川 直人	75		
幹事	柳田 力	75		
幹事	満井 和正	76		
幹事	浅川 章	76		
幹事	藤山 信重	77		
幹事	草野 幸次	77		
幹事	椎野 靖啓	78		
幹事	宗像 良保	78		
幹事	大竹 英雄	79		
幹事	山元 紀美	79		
幹事	上石 利男	80		
幹事	安部 直文	80		
幹事	斎藤 誠	81		
幹事	石井 俊一	82		
幹事	古川 清志	82		
幹事	永山 幸男	82		
幹事	川口 勝広	83		

役職	氏名	期	勤務先・自宅住所	TEL/FAX
幹事	小林 伸久	84		
幹事	境 君夫	85		
幹事	芳賀 雅美	86		
幹事	本田 宏	86		
幹事	坂路 誠	87		
幹事	富塚 弘之	87		
幹事	大矢 真弘	88		
幹事	渡辺 政信	88		
幹事	鈴木 修一	89		
幹事	有我 明則	90		
幹事	渡部 良朋	91		
幹事	増子 浩重	92		
幹事	斎藤 宏海	93		
幹事	阿部 力也	94		
幹事	鎌田 光明	94		
幹事	藤田 健彦	96		
幹事	佐藤 厚	97		
幹事	小野崎 敦	97		
幹事	宗像 孝	98		
幹事	遠藤 昌明	99		
幹事	佐藤 誠幸	101		
幹事	川前 徳章	102		
幹事	土田 隆弘	105		
幹事	加藤 祐一	105		
幹事	稲垣 直規	106		

株式会社オオツヤ
代表取締役 **大津 隆** (63期)

〒243-0019 厚木市栄町 2-9-20-3
TEL/FAX 046-221-1546
FAX 046-223-2238

昭和 29 年卒業

遠藤 修 (67期)

〒215-0015
住所 川崎市麻生区虹が丘 1 丁目18番 6 号
電話 044-988-7387
FAX 044-988-7547
E-mail o-endou@01.246.ne.jp
勤務先 株式会社 富士ハイエンジニアーズ
代表取締役
〒215-0015
所在地 東京都港区新橋 4 丁目21番 7 号
つなや加藤ビル
電話 03-3439-1611
FAX 03-3434-7958

水口 禎 (67期)

〒270-1423 千葉県白井市南山 1-10-1006
TEL/FAX 047-492-7297

編集後記

○前号の牽強付会の拙稿「カンプラと掛けてノーベル賞と解く」がきっかけで、58期の海村氏と60期の小針氏から斉藤徳太郎先生についての貴重な興味ある文を寄せて戴き、有り難うございました。

お二人の文に見られる60年前の戦中・敗戦直後の安積とその中の斉藤先生の姿。私たちの愛するネイティブ語への先生の「強烈な関心」などが生々しく伝わってきます。

小針先輩が今に伝える「ジェー語」という傑作なネーミングにある種の感銘を覚えます。この語に匹敵するのは一昨年亡くなられた竹花先生が戦後社会風潮から創出された「ドライマン」ではないでしょうか。この語はその後、竹花先生ご自身のあだ名ともなり安積の戦後史(伝説?)に定着しています。

○今日は1954年の3月1日から、丁度50年の日。この日の朝、生まれ育った本宮を発った(当日卒業式が行われていた郡山を通過し)私は6時間で上野に到着。この日が私と「東京桑野会」との係わり合いの初日となりました。

入試日の縁から入学後も練馬区関町に住むことになりましたが、翌日の読売新聞が第五福竜丸のピキニ被爆をスクープという時代。家は叔父たちが職場の仲間と建てたというミニ団地。その職場とは71期の大和田允彦氏寄稿(16頁)に登場する「電気通信研究所(通研)」であり、二軒隣には50期の橋本太吉先輩が住んでおられました。大学在学中には当時通研が誇る開発中(?)の「アナログの電子計算機」も見学させて戴きました。

○創立120周年の記念すべき節目の年に母校を巣立った、男女共学一期生のフレッシュな仲間を「東京桑野会」へ熱烈に迎えたいと思います。6月19日には〈椿山荘〉で共に歓談と素晴らしい料理とお酒と庭園に乱舞する蜚を!

(67期 水口禎)

○今年は母校の創立120周年の記念すべき年。記念号となった会報の表紙をかざったのが、安積同期(71期)のクラスメイト、長尾(旧姓小山)勉君が描いた在学当時(昭和33年卒業)をしの

ばせる力作で、長尾君のご好意により使わせて頂いた。そのほか、例年同様同期の諸氏には原稿や広告で協力をして頂いた。この場を借りて感謝申し上げます。今年は創立120周年のほかに、共学1期生が巣立ち、我々の仲間として総会に初登場してくる(?)年であり、真に記念すべき年です。彼らを大いに歓迎しようではありませんか。そして彼らと一緒に新しい東京桑野会の歴史を作って行こうではありませんか。

(71期 増子邦雄)

○'04.3.1、安高から女子の第一期生が卒業。建学120年目の快挙。おめでとうございます。今回のイラストはそれを記念して、久々に花かつみの会の山口陽弘さん(高校3回)にお願いしました。お名前はヨーコと読みます。作品をお借りにアトリエを訪ねて初めておめにかかりました。私よりは10年先輩ですが、若々しく美しい方でした。目下100号の制作に取り組んでおられ、その想像力と制作意欲に圧倒されてしまいました。

○表紙を飾ったのは71期の長尾勉さんです。清潔感あふれる作品でお人柄をそのまま表現されているように思います。このイラスト画は別途お分けすることが出来ますので、ご希望の方は024-932-2210(長尾デザインルーム)までお申し込みください。

○原稿依頼のため73期の渡辺周一(柏書房社長)さんを訪ねました。アポをとってお訪ねしましたが、40年以上も会っていないのに「高松です」と言えば、「オウ!ユタカカ入レ!」「はい」「オウ!イイカオニナクッタナ!」「先輩もお元気で…。40年が昨日のようでした。残念なことに精神労働限界!知的活動極限のため原稿は次回となりました。

○会報編集会議コースの18番が終わると19番のそば屋で打上げをします。その日は「正多面体は正四面体、正六面体、正八面体、正十二面体、最多面体は正二十面体なんだよネ」と理系のMさん。みんな感心したり、飲んだりしていたが「Mさん、自然界には直線は存在しないんですよ…人工を除いて…」とTさんが芸術系的問い。真つ正面で酒をグイと飲みつつSさん「直線がない?そんなことはないアル!オレが立証してみせる!」と法律系的受。ヒ

ゲのSさん「その話おもしろい、後記に書いてくれませんか。解りやすく組み立てて…」と建築的発想。「後記はまたあうように送って下さい」と印刷系的念をKさん。問答に参加せずの管理系のMさん。ニヤツとして寡黙の文芸系のWさん。かくして解散。

(74期 高松豊)

○120周年記念号として、かなり充実した内容になりました。原稿の量が多い分、編集会議は長時間、プロの編集者もいて助かります。最近編集においてもインターネットの威力は大変なものを感じます。

(78期 櫻井淳)

事務局便り

●会報の発送は、会員各位の住所動向に大きく左右されてしまいます。住所が変わっていると、せっかくの会報も戻ってきってしまうので、住所変更の際は東京桑野会の事務局まで、ご連絡下さるようお願い致します。安積桑野会の方にご連絡された方も、ご面倒でも東京桑野会の方にもご連絡下さい。

●総会の出欠葉書を同封していますが、事務処理の都合上葉書には必ず住所、氏名、期を記入して下さい。時々ご自分の期と卒業年を間違えておられる方がいらっしゃいますが、会報を送りした封筒の宛名ラベルの右下に記入してあるのがご自分の期ですので、お間違えないようお願い致します。勤務先は変更がなければ省略していただいても結構です。

そして、連絡もれもあるかと思われまますので、お誘い合わせのうえ、多数のご出席をお願いします。

『東京桑野会会報』No.26

2004年4月1日発行

発行・編集人●古川 清

発行所●東京桑野会

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-3-8

YKB新宿御苑804

斉藤法律事務所気付

Tel 03-3356-6677 Fax 03-3356-6678

http://www.tokyo-kuwano.com

製 作●株式会社パンオフィス

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-2-7

Tel 03-5280-9690 Fax 03-5280-9691